十方佛土の中には唯だ一乘の法のみ有り、二も無くまた三も無し。——方便品

と明言せられたのに依つて見れば、いかに多くの佛が世に出て如何に多くの敎を說かれても、その歸着する所は必ず一なるべきことが信ぜらるゝのである。吾々は凡夫であるから、たゞ仰いで佛の語を信ずるより外はない。佛も多くまします中に於て此の吾々の住む娑婆世界の敎主として出現せられたのが即ち釋尊であつて、釋尊の敎へたまへる所が凡ての人に守らるゝやうになれば、此の娑婆世界が漸く佛の國土に變つて行く筈である。釋尊が自ら

如來は安樂にして少病少惱なり。諸の衆生等は化度す可きこと易し、疲勞あること無し。——涌出品

と仰せられたのも、畢竟其の貴い敎がやがて普く此の娑婆世界に弘まるべきことを確信したまへるが爲ではなからうか。なほ又

而も實には滅度せず、常に此に住して法を說く。——壽量品

と仰せられたる、『こゝに住して』とは此の娑婆世界のことである。また

我が此土は安穩にして天人常に充滿せり。——壽量品

と仰せられたる『此土』といふも、同じく此の娑婆世界のことである。されば此の娑婆世界は永久に釋尊の住したまふ所で、必ず後には天人常に充滿する安穩の世界が此處に實現すべきこと疑ひを容れぬ所である。これ實に釋尊が此の娑婆世界に出現したまへる賜であると思へば、佛恩の洪大なること何にも譬ふべきものがないのである。

此の洪大なる佛恩に感激して、自身も何卒身命を擲つて佛の遺したまへる敎を弘め、一切の世の人をして疾く此の大なる惠に浴せしめやうと決心した人々も決して少くない。大乘佛敎が永く後の世に傳はつたに就ては、此等の人々の努力に對しても深く感謝しなければならぬ事である。殊に佛敎が印度から支那を經て、本朝に傳はるに就ては、多くの人々の非常なる苦心が之に加はつて居る。むかしの交通不便なる時代に或は山を越え或は海を渡つて數千里の遠きに赴き、佛の貴い敎を習ひ傳へ、又多くの經論を携へ歸つて之を飜譯するといふ如き業は、固より身命を擲つだけの勇氣と信念とをなくして出來得ることではない。彼の羅什三藏が死に臨んで『吾が傳へた所は必

ず佛の御本意に違はぬと信ずる。吾が死して後に遺骸を火に附するならば、舌のみは燒けずに殘るであらう。これ吾が眞實の事のみを傳へた證據である』といつたといふ傳說の如きも、明に其の自信の程を語るものではないか。獨り羅什のみならず、是程の確信を以て佛法を弘めた人は少くないのである。又多くの名君賢王が佛法の興隆に力を盡したる事蹟もいろ〳〵有るが、何れも一身一家の繁榮を祈るといふやうな卑い考へから出たのではなく、佛の正法によつて國を治むることが眞の國利民福を進增する所以であると信じたるが爲である。法華經の中に昔の檀王のことを說いて、

普く諸の衆生の爲に大法を勤求して、亦た己が身及び五欲の樂の爲にせず。故に大國の王と爲りて勤求して此法を獲て遂に成佛を得ることを致せり。——提婆品

とあるが、是れ即ち眞の名君賢王の志である。此の如き名君と不惜身命の覺悟を有する法師とが力を協せて佛法の弘通に努むる時には、國民は眞の幸福を享くることが出來るのである。此の如き事を一切忘れ果て、たゞ西方の極樂淨土にあくがれ、國土に不祥の事の起るのを顧みぬは惑へるの甚しきものといはなければならぬ。

客殊作レ色曰。我本師釋迦文。說二淨土三部經一以來。曇鸞法師捨二四論講說一。一向歸二淨土一。道綽禪師閣二涅槃廣業一。偏弘二西方行一。善導和尙拋二雜行一立二專修一。慧心僧都集二諸經之要文一。宗二念佛之一行一。貴二重彌陀一。誠以然矣。又往生之人其幾哉。就レ中法然聖人。幼少而昇二天台山一。十七而涉二六十卷一。並究二八宗一。具得二大意一。其外一切經論七遍反覆。章疏傳記莫レ不二究看一。智齊二日月一。德越二先師一。雖レ然猶迷二出離之趣一。不レ辨二涅槃之旨一。故遍覽悉鑑。深思遠慮。遂拋二諸經一。專修二念佛一。其上蒙二一夢之靈應一。弘二四裔之親疎一。故或號二勢至之化身一。或仰二善導之再誕一。然則十方貴賤低レ頭。一朝男女運レ步。爾來春秋推移。星霜相積。而忝疎二釋尊之敎一。恣譏二彌陀之文一。何以二近年之災一。課二聖代之時一。强毀二先師一。更罵二聖人一。吹レ毛求レ疵。剪レ皮出レ血。自レ昔至レ今。如レ此惡言未レ見。可レ惶可レ愼。罪業至重。科條爭遁。對座猶以有レ恐。携レ杖而則欲レ歸矣。

客殊に色を作して曰く、我が本師釋迦文淨土の三部經を說きたまひて以來、曇鸞法師は四論の講說を捨て一向に淨土に歸し、道綽禪師は涅槃の廣業を閣て偏に西方

の行を弘め、善導和尚は雜行を抛ちて、專修を立て、慧心僧都は諸經の要文を集めて念佛の一行を宗とす。彌陀を貴重すること誠に以て然なり。又往生の人其れ幾くぞや。就中法然聖人は幼少にして天台山に昇り、十七にして六十卷に涉り、並に八宗を究め、具に大意を得たり。其外一切の經論七遍反覆し、章疏傳記究め看ざる莫く、智は日月に齊しく德は先師に越えたり。然りと雖も猶ほ出離の趣に迷ひ、涅槃の旨を辨へず。故に遍く覿悉く鑑み深く思ひ遠く慮り、遂に諸經を抛ちて專ら念佛を修す。其上一夢の靈應を蒙り四裔の親疎に弘む。故に或は勢至の化身と號し、或は善導の再誕と仰ぐ。然れば則ち十方の貴賤頭を低れ、一朝の男女歩を運ぶ。爾ありしより來春秋推移り星霜相積れり。而るに忝くも釋尊の敎を疎にし忽に彌陀の文を譏る。何ぞ近年の災を以て聖代の時に課せ、强ちに先師を毀り更に聖人を罵るや。毛を吹て疵を求め皮を剪て血を出す。昔より今に至るまで此の如き惡言は未だ見ず、惶る可し愼む可し。罪業至て重く科條爭でか遁れん。對座猶ほ以て恐あり、杖を携へて則ち歸らんと欲す。

○釋迦文　釋迦牟尼といふも同じ意である。○四論の講說　龍樹の作なる大智度論と中論と十二門論、及び提婆の作なる百論とのことである。いづれも一切空の法門を說いたもので、唐の時代には大に研究せられたのである。○涅槃の廣業　涅槃經の研究のことである。此經は釋尊最後の敎である故に、殊に重んぜられたものである。此經は北本と稱する譯本は四十卷、南本と稱するのは三十六卷あり、その研究は容易でないから廣業といふのである。○慧心僧都　名は源信といふ、天台宗の僧であるが、横川の慧心院に居たので慧心院の僧都と稱せられた。後一條天皇の寬仁元年に示寂。○諸經の要文を集め　往生要集三卷のことである。此書は多くの經論の要文を集めて念佛往生の義を明にしたもので、法然上人の選擇集の前驅を爲すものである。○往生の人　極樂に往生することを旨として念佛の修行を勵む人の事である。○六十卷　天台大師の著なる摩訶止觀と法華玄義と法華文句とを併せて三大部といひ、法華經を研究するには最も肝要なるものである。三書併せて六十卷である。○出離の趣　如何にして苦惱に充ちたる娑婆世界を出離し得べきかといふこ

と。○一夢の靈應　法然上人が夢に善導和尚にあひ、念佛の敎を遍く弘めよと奬勵せられたことをいふ。○四裔の親疎　四裔とは四方のことである。國中の一切の人に親疎を問はず念佛の貴いことを敎へたのである。○勢至の化身　勢至菩薩は阿彌陀如來に侍して、常にその化導を輔けたのである。されば念佛を弘むる人を貴んで勢至の化身といふ。○爾ありしより來　法然が專修念佛を唱へてから、今の文應元年まで凡そ八十五年である。

前にも概略いつたやうに、吾國に於ては往古から支那朝鮮との交通が絕えずあつた爲に、佛敎も此等の國々を經て傳へられたのである。而して奈良平安の朝に於ては、交通も愈々頻繁になり、隨て佛敎の典籍も多く渡來し、彼地から名僧の遙々と來朝するものさへあつた。まして吾國から彼地に留學する者の數は、固より少からぬことであつた。當時の支那は唐朝であつて、その文化の進んだことは殆んど前後に比類のない程であつたから、吾が國人が之に對して盛に崇拜の念を起したのも無理のないことである。宇多天皇の寬平六年からは遣唐使をやめることになつたが、それ迄は每年遣唐使の行くたびに其の船に便乘して留學生や留學僧が行つたのである。斯る間に支那から本邦に傳はつた佛敎は凡て八宗あつたのであるが、それに伴つて淨土門の敎も傳はつて來た。元來此の淨土門の敎は支那の南北朝時代に發達して來たものであるが、唐朝に至つて初めて隆々たる勢を示すやうになつたのである。されば唐との交通の盛であつた時代に、それが本邦に傳はつたのは當然の事である。但し淨土門の敎が最初から獨立して傳はつたのではなく、他の敎義と相伴つて傳はつたものである。當時吾が國に於ては天台眞言の二宗が殊に盛であつたが、就中天台宗の根據地たる叡山に於ては、獨り其宗の敎義のみならず遍く各宗の敎義を兼學することに力を用ゐて居た。(獨り佛敎各宗のことのみならず、汎く支那の文藝學術に就ての研究は叡山を中心にして行はれたといふのも過言であるまい。)それで此の淨土門の敎義も先づ之を究めた者は叡山の學徒であつた。其の叡山の學徒の中から出て念佛をすゝむる魁をしたものは、前にもいつた空也上人であつた。その反響は可なり大きいものであつたが、之に次いで起つた慧心僧都の影響は更に大きかつた。慧心僧都は學も深く德も高く、朝野の尊

信も至て厚かつた。此人が念佛をすゝめたのであるから、世間の人々も大に耳を傾けた筈である。往生要集は其の四十三歳の時の作であるが、その發端に於て

顯密の敎法其文一にあらず、事理の業因その行惟れ多し。利智精進の人は未だ難しと爲さず、予が如き頑魯の者豈に敢てせんや。是故に念佛の一門に依つて聊か經論の要文を集む。

といつてある。彼の如き學德のある人が自ら『愚なもので、むづかしい敎理は分らぬから念佛の一門に依るのである』といつて衆を誘ふのであるから、之に動された人々の多かつたのも不思議ではない。しかし慧心は念佛より外のことは一切說かぬといふので無く、天台宗の名匠としても其の意見を立派に發表して居る。即ち其の六十一歳の時に著はした『一乘要訣』を主として法華經に關する著述も種々ある。而して彼の學說を祖述する一派は、後に慧心流と稱せらるゝのである。

然るに法然上人の出るに及んでは、一切の敎學を盡く排斥して唯だ念佛をのみすゝめたので、こゝに其の特色が明かに顯はれて居る。此人もまた慧心僧部と同じく叡山から出た。最初は一切經及び諸宗の章疏を研究して、同輩の間に智慧第一と稱せらるゝ程の人であつたが、後に唐の善導の書を讀んで大に感じ、斷じて淨土門に入つたのである。其の門人勢觀房の請によつて、後の門下一同の爲に書き遺したる一枚起請文は至て簡單なものであるが、淨土門の敎義の要領を悉したものである。

もろこし我朝にもろ〳〵の智者たちの沙汰し申さるゝ觀念の念にもあらず、又學問をして念のこゝろをさとりて申す念佛にもあらず。たゞ往生極樂のためには南無阿彌陀佛と申せば、疑ひなく往生するぞと思ひとりて申すほかは別の仔細候はず。但し三心四修なんど申すことの候は、みな決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞと思ふうちにこもり候なり。この外に奧深きことを存ぜば、二尊の御あはれみにはづれ本願にもれ候べし。念佛を信ぜん人は、たとひ一代の法をよく〳〵學すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同じくして、智者のふるまひをせずして唯一向に念佛すべし。(建暦二年、八十歳の時の作である。)

斯く一切の敎學を捨て、たゞ一文不知の愚鈍の身となつて偏に阿彌陀佛の御力に縋る

といふ態度が、非常なる感化を凡ての人に及ぼしたものと思はれる。勿論阿彌陀佛以外の一切の佛菩薩には歸依するに及ばぬ、淨土三部經より以外の一切の經論をすてよとの主張は、從來の諸宗を盡く排斥することになるのであるから、諸宗の人々が之をゆるして置く筈がない。果して種々の迫害が其身に及び、土佐に配流せらるゝ事にもなつた。しかし其の一般國民に及ぼしたる勢力は非常なもので、後に親鸞上人が和讃を作つて、

本師源空世に出て、弘願の一乘ひろめつゝ、日本一州ことごとく、淨土の機緣あらはれぬ。

といひ、なほ又

善導源信すゝむとも、本師源空弘めずは、片州濁世のともがらは、いかでか眞宗をさとらまし。(源信とは即ち慧心僧部のことである。)

といつたのは過褒の言ではない。斯る大勢力に對して、徒手空拳を以て起つたものが即ち日蓮上人なのである。

主人咲止曰。習二辛蓼葉一。忘二臭溷厠一。聞二善言一而思二惡言一。指二謗者一而謂二聖人一。疑二正師一而擬二惡侶一。其迷誠深。其罪不レ淺。汝聞二事起一。委談二其趣一。釋尊說法之內。一代五時之間。立二先後一辨二權實一。而曇鸞道綽善導旣就レ權忘レ實。依レ先捨レ後。未レ探二佛敎淵底一者。就レ中法然雖レ酌二其流一。不レ知二其源一。所以者何。以二大乘經六百三十七部。二千八百八十三卷。並一切諸佛菩薩。及諸世天等一。置二捨閉閣抛之字一。薄二一切衆生之心一。是偏展二私曲之詞一。全不レ見二佛經之說一。妄語之至。惡口之科。言而無レ比。責而有レ餘。人皆信二其妄語一。悉貴二彼選擇一。故崇二淨土之三經一。而抛二衆經一。仰二極樂之一佛一。而忘二諸佛一。誠是諸佛諸經之怨敵。聖僧衆人之讎敵也。此邪敎廣弘二八荒一。周遍二十方一。抑以二近年之災難一課二往代一之由。强恐レ之。引二先例一可レ悟二汝迷。

主人咲み止めて曰く、辛きを蓼葉に習ひ臭きを溷厠に忘る。善言を聞きて而も惡言と思ひ、謗者を指して而も聖人と謂ひ、正師を疑ひて而も惡侶に擬す。其迷誠に深く其罪淺からず。汝事の起りを聞け、委しく其趣を談ぜん。釋尊說法の內、一代五時の間に先後を立て權實を辨ず。而るに曇鸞道綽善導旣に權に就きて實を忘れ

先に依りて後を捨つ。未だ佛教の淵底を探らざる者なり。就中法然は其流を酌むと雖も其源を知らず。所以は何。大乘經の六百三十七部、二千八百八十三卷、並に一切の諸佛菩薩及び諸の世天等を以て、捨閉閣抛の字を置きて一切衆生の心を薄す。是れ偏に私曲の詞を展べ、全く佛經の說を見ず、妄語の至、惡口の科言ひても比無く責めても餘有り。人皆其妄語を信じ彼の選擇を貴ぶ。故に淨土の三經を崇めて衆經を抛ち、極樂の一佛を仰ぎて諸佛を忘る。誠に是れ諸佛諸經の怨敵にして、聖僧衆人の讎敵なり。此の邪教廣く八荒に弘まり、周く十方に遍くす。抑も近年の災難を以て往代に課すの由強ちに之を恐る。聊か先例を引きて汝が迷を悟す可し。

○辛きを蓼葉　蓼の葉を食ふ虫は其の葉の辛きになれて、味がよいと思つてゐる。

○臭きを溷厠に　蠢は厠の中に居て其の臭きを知らず、穢れた中に安んじてゐる。

○謗者　佛の正しい教に背く者のこと。言に出して謗るのみならず、凡て正法に乖離するを誹謗といふのである。○先後を立て　先とは法華經を說かるゝ前、後とは法華經及び涅槃經を說かるゝ間をいふ。無量義經に『四十餘年には未だ眞實を顯はさず』とあつて、前の四十餘年間の說の方便にすぎぬことは明である。○權實を辨ず　權とは即ち方便である、眞實の教の現はるゝまで假に說かれたものである。實とは即ち眞實の教である。○先に依り　淨土の三部經の如きは法華經よりも以前に說かれたものである。○其源を知らず　佛の說かれた所は本である、後世の人の解釋等は末である。後世の人の說に基いて、佛意に背くのは本末顚倒である。これ其の根源たる佛說に暗いから起る過である。

釋尊五十年間の說法は淺深高下さまざまである。それは聽く者の機根もそれぞれに異り、又法を說かるゝ場合もさまざまに異つて居たからである。之が爲に後の世に生れたものは何れが果して佛の御本意であるかを明にし難くして、就く所に惑ふを免れぬのである。佛の御入滅後あまり久しく隔らぬ間は、直接その教化を受けた人々の言ひ傳へ語り傳ふる所に自ら佛の御精神が籠つてゐるから、さまでの疑惑も起らぬけれども、遙かに後の世となれば專ら經論等によつて教を受けなければならぬのであるから、何れの經何れの論を中心として自己の信仰を定むべきかといふ疑惑は必ず起るべ

き筈である。斯る疑惑の必ず起るべきことを佛は豫め知つて居られた故に、涅槃經の中に於て後世の者の信仰を定むべき標準を示し置かれたので、これを四依といふのである。即ち

是の諸の比丘當に四法に依るべし。何等をか四と爲す。法に依りて人に依らず、義に依りて語に依らず、智に依りて識に依らず、了義經に依りて不了義經に依らず。

是の如き四法應に證知すべし。

といふのが經の文である。第一に法に依りて人に依らずといふは、いかに世間の地位あり勢力ある人が信じたとてそれに雷同してはならぬ、たゞ如何なる法が最も正しいかを分別して、その正しいものに依らなければならぬとの意である。第二に義に依りて語に依らずといふは、經論等の言語文字に囚はるゝこと無く、其中に含まるゝ眞の意義を考へて之に依らなければならぬとの意である。第三に智に依りて識に依らずといふは、本末を顚倒してはならぬといふことである。智といふは佛の智慧のこと、識といふは後世の人の意見や解釋のことである。佛の敎は根本で後世の解釋は之に附け加へられたものであるから、もし兩者が一致せぬ時には佛の敎に依つて後世の說を捨てなければならぬのである。第四に了義經といふは佛の本意を打明けられたる眞實の敎のことで、不了義經とは此の眞實の敎に到達すべきために方便として說かれたる敎のことである。末世に生れた者が其の信仰を確立せん爲には、必ず不了義經をすてゝ了義經に依らなければならぬのである。而して法華經が『正直に方便を捨て但だ無上道を說く』所の經であること、『後の五百歲の中に廣宣流布』すべき經であることは佛の自ら明言したまふ所である。末世に至れば凡ての佛の化導の力も失せ、凡ての經の力も失せはてゝ、唯だ阿彌陀佛に縋つて極樂往生を求むるより外に道がないといふのは、後世の者の言である。其の何れを信ずべきかは多言を要せずして明ではないか。

日蓮上人が

宗々互に權を諍ふ、予此をあらそはずたゞ經に任すべし。——開目鈔

といつたのは、實に公明正大なる心事を語るものと稱すべきである。上人が北條執權に對して屢々諸宗の高僧碩學等と對論せんことを要求したのも、自ら一宗一派を開か

うなどゝいふ考へは微塵もなく、たゞ釋尊の御本意を明にして末世の衆生に向ふ所を知らしめたいといふ熱誠から出たものである。法然上人を攻擊するのは法然其人を惡むが爲でない、たゞ一切衆生を愛するの至情から止むに止まれぬが爲なのである。

止觀第二。引二史記一云。周末有下被髮袒身。不レ依二禮度一者上。弘決第二釋二此文一。引二左傳一曰。初平王之東遷也。伊川見二被髮者而於レ野祭一。識者曰。不レ及二百年一。其禮先亡。爰知徵前顯災後致。又阮籍逸才。蓬頭散帶。後公卿子孫皆敎レ之。奴苟相辱者。方達二自然一。撙節兢持者。呼爲二田舍一。爲二司馬氏滅相一。

止觀の第二に史記を引きて云く、周の末に被髮袒身にして禮度に依らざる者有り。弘決の第二に此文を釋するに、左傳を引きて曰く、初め平王の東遷するや、伊川に被髮の者にして野に於て祭るを見る。識者曰く、百年に及ばざらん、其禮先づ亡びぬと。爰に知ぬ、徵前に顯れて災後に致ることを。又阮籍逸才にして蓬頭散帶す。後に公卿の子孫皆之に敎ひ、奴苟相辱むる者を方に自然に達すといひ、撙節兢持する者を呼んで田舍と爲す。司馬氏の滅ぶる相爲り。

○止觀　天台大師の著せる摩訶止觀のこと。○被髮袒身　被髮とは髮を結ばずして散らしたまゝのこと。袒身とは衣の肩を脫いでゐる者で、蠻人の姿である。○弘決　唐の妙樂大師が摩訶止觀に註解を加へたもので、正しくは『摩訶止觀輔行傳弘決』といふのであるが、略してたゞ弘決とのみいふ。○平王の東遷　犬戎の難を避けて都を洛陽に移したのである。○野に於て祭る　祭るには衣冠を正しくすべきに被髮にして祭るは全く禮を無視したるものである。○百年に及ばざらん　國の亡びるまで百年はかゝるまいといふ意である。○阮籍　晉の隱士で全く名利の念なく、禮節に拘はらず、酒を樂んで一生を終つた。所謂竹林の七賢人の一である。○蓬頭散帶　髮も結ばず帶も解けかゝつた儘である。○奴苟相辱む　互ひに禮儀をすて、罵りあひ笑ひあつて交際して居るのである。○撙節疑持す　禮節を執り守ることに專にして、違はんことを恐れて居る者である。○司馬氏　晉の天子は司馬氏である。禮節を無視するものが勢力を得たのは、其國の滅亡する前兆であつたのである。此處に周末の事と晉の時代の事を引用したのは、頗る意味の深いことである。國の

衰亡は一朝一夕にして來るものではない、國民の精神が次第に腐敗して放逸怠慢の風が次第に世に勢力を得て來ることが即ち衰亡の因となるのである。易の文言に、

積善の家には必ず餘慶あり、積不善の家には必ず餘殃あり。臣その君を弑し、子その父を弑するは一朝一夕の故にあらず、其の由來する所の者漸なり。之を辨じて早く辨せざるに由る。易に曰く霜を履んで堅氷至ると。蓋し順をいふなり。

とあるのは眞に至言と稱すべきである。一家も一國も道理は同じことである。されば眞に國を愛するものは最も國民の氣風の頽廢することを憂ふべきである。上下の節が亂れ長幼の序が壞れ、人々互ひに自ら恣にして尊むべきを尊まず敬ふべきを敬はず、恩を忘れ義を忘るゝに至れば、いかに國富み兵强くとも必ず久しからずして衰亡に至るべきである。彼の周の平王の時に禮の亡びたるを見て、識者は必ず百年に及ばずして國の亡ぶべきことを知り、晉の代に公卿の子弟が禮節を無視したのが、やがて滅亡の階となつたといふは大に味ふべき事である。日蓮上人が賴朝を謀叛人の一に數へたのも、要するに此の見地からであらう。賴朝が海内の兵亂を鎭め人民を安堵せしめた功勞は爭はれぬものである。又其の鎌倉に幕府を開いて簡易なる武門政治を創めたのも、確かに時代の要求に應ずる機宜の處置と稱すべきである。しかし京と鎌倉と相對立して、政令が二途に出るの有樣となり、果して何れが日本國の中心であるか明でないやうになつたのは、即ち國の統一を弱め秩序を紊るものであつて、即ち爭亂の階を爲すものといはなければならぬ。北條氏が主家を倒して政權を恣にし、多くの將士が唯々として其の指揮命令を聽き、天皇上皇に對して弓を引くに至つたのも、畢竟賴朝が斯る不必得な事をしたのから端を發したといはなければならぬ。易の文言に『一朝一夕の故にあらず』といつた通りである。凡ての行ひは心が元であるから、行ひの正しからぬのを改めやうとすれば、先づ其の心から正してかゝらなければならぬ。古來の明君賢王が力を佛法の興隆に用ゐたのも實に之が爲である。日蓮上人は此間の關係を說いて、

天晴れぬれば地明なり、法華を識る者は世法を得べきか。――觀心本尊鈔

といつたが、法華經の敎が若し凡ての人の心によく入つて、人々の具有する佛性が次

第にその光を發するやうになれば、國土の安穩は期して待つべきである。信仰は心の根抵となるものであるから、最も其の選擇を愼まなければならぬ。若し其の根抵に緩みがあれば、其の一言一行に種々の缺陷が生じて來るわけである。彼の竹林の七賢人の如きも確かに立派な人物であつたのであらう。世間の功名富貴の爲に心を動さず、自ら淸貧に安んじて生涯を終つたのは、決して尋常一樣の人物の能くする所ではない。しかし青年の人々が其の精神を捉へずして其の言行をのみ學ぶ時には、禮節を壞り秩序を紊し、やがて亂の基となるのである。それ故に竹林の七賢人を高士として重んずるのはよいが、之を凡ての人の範とすることは甚だ危險である。國民全體の信仰を托すべき敎を擇むについては、尤も心を此點に止めなければならぬ。たとへ高尙でも奇拔でも、凡ての人が之を信仰し之を實行して、何等の弊をも生ぜぬやうな敎でなければ永久に之を世に弘めることは出來ぬのである。釋尊が一切衆生を皆佛とし、此の娑婆世界を淨く美はしい佛國土に化せしめんとの大慈悲心から說かれた敎を無視してかへりみず、又此の尊い國に生れて此國を尊まず、之を東海の片土であると卑しみ、

專ら西方の淨土に往生せんことを求むるが如きは、佛恩を忘れ國土の恩を忘るゝものといはなければならぬ。斯る敎を本として此國の秩序を保ち統一を固うすることの出來やうわけは無い。日蓮上人の生涯の主張たる『立正安國』といふ點から見て、斷々乎々として之を排斥したのは當然の事である。

又案二慈覺大師入唐巡禮記一云。唐武宗皇帝會昌元年。勅令下章敬寺鏡霜法師。於二諸寺一傳中彌陀念佛敎上。每寺三日。巡輪不レ絕。同二年回鶻國之軍兵等侵二唐堺一。同三年河北之節度使忽起レ亂。其後大蕃國更拒レ命。回鶻國重奪レ地。凡兵亂同二秦項之代一。災火起二邑里之際一。何況武宗大破二佛法一。多滅二寺塔一。不レ能レ撥レ亂。遂以有レ事。以レ此惟レ之。法然者後鳥羽院御宇。建仁年中之者也。彼院御事。既在二眼前一。然則大唐殘レ例。吾朝顯レ證。汝莫レ疑汝莫レ恠。唯須二捨レ凶歸レ善。塵レ源截レ根矣。

又慈覺師大の入唐巡禮記を案ずるに、云く、唐の武宗皇帝の會昌元年、勅して章敬寺の鏡霜法師をして諸寺に於て彌陀念佛の敎を傳へしめ、每寺に三日にして巡輪することを絕えず。同二年回鶻國の軍兵等唐の堺を侵す。同三年河北の節度使忽に亂

を起す。其後大蕃國更に命を拒み、回鶻國重ねて地を奪ふ。凡そ兵亂秦項の代に同しく、災火邑里の際に起る。何に況や武宗大に佛法を破し多く寺塔を滅す。亂を撥むること能はずして遂に以て事有り。此を以て之を惟ふに、法然は後鳥羽院の御宇建仁年中の者なり。彼院の御事既に眼前に在り。然れば則ち大唐に例を殘し吾朝に證を顯す。汝疑ふこと莫れ汝怪むこと莫れ。唯だ須らく凶を捨て善に歸し源を塞ぎ根を截るべし。

○入唐巡禮記　入唐求法巡禮行記といふのが正しい名で、凡て四卷ある。唐の開成年中から會昌年中、回鶻の入寇した頃の事までが書いてある。○秦項の代　秦の末に天下亂れて項羽起り、項羽亡びて後漢の天下となつたのである。○大に佛法を破し　武宗の會昌五年に佛寺四萬餘を毀ち、僧尼二十六萬餘を還俗せしめた。○彼院の御事　後鳥羽、土御門、順德の三院兵を起して北條氏を討ちたまひしも克たず、承久三年後鳥羽院は隱岐に、土御門院は土佐に、順德院は佐渡に御遷幸になつた。日蓮上人はその翌年の貞應元年に誕生せられたのである。

淨土門の敎は唐の代に於て大に盛になつた。彼の善導和尙の如きは高宗皇帝をはじめ多くの人の歸依を得て、其の念佛を唱ふる一聲每に光明がその口から出たとさへいひ傳へられてある。然るに此人の最後の有樣は奇怪なものであつた。即ち善導は『此身厭ふべし、吾將に西に歸らんとす』といつて、寺前の柳樹に登り地に投じて死んだのである。此の如くに此の世の生活を厭ひ西方淨土にあこがるゝ思想が世に弘まるに於ては、國土の安穩も望まれず、國力の發展も期せられぬこと勿論である。其後二百餘年にして回鶻のために國を奪はれんとしたのも、更に不思議のことではない。武宗は佛法が風敎を壞るものであるとの考へから、佛寺を破壞し僧尼を還俗せしむる等の英斷をやつたが、固より佛法の何物なるかをよく理解しての事ではない。眞に佛法が正しく敎へられ正しく弘めらるゝ時には、國家の基礎が最も鞏固になるべきものであることを武宗は全く知らなかつたのである。是は武宗一人の罪ではない。佛法を弘むる者の罪である。

承久の亂は仲恭天皇の御宇のことで、法然上人が死んでから九年の後に當り、彼の

選擇集の建久九年からは二十三年の後に當る。されば其の主唱したる淨土門の敎の最もよく世に弘まつた時である。然るに北條義時が三上皇を遠い島々へ御遷し申したのを武士も百姓も共に平然として見て居たのである。武士は殊にその義時の下知に從つて官軍を打破つたのである。鎌倉勢が官軍に對抗すべく打立つ時に、二位尼政子が重なる將士に對して諭告を試みたことが承久記に書いてある。

一ノ院こそ長嚴尊長長季胤義等が讒言につかせ給ひて、義時を討たんとて先づ光季を討たれ候なれ。君をも世をも恨むべきにあらず、唯だ我身果報の拙きなり。……

……たとひ我身なくとも鎌倉の安からん事をこそ草の蔭にても見んと思ひつるに、忽に牛馬の牧とならんずらんこそ口惜けれ。三代將軍の御墓のあと形なく失なん事こそあはれなれ。人々見給はずや、むかし東國殿原は平家の宮仕へせしには、かちはだしにて上り下りしぞかし。故殿鎌倉を建させ給ひて京都の宮仕へもやみぬ。恩賞打續き樂みさかえて有るぞかし。故殿の御恩をばいつの世にか報じ盡し奉るべき。身のため恩のため、三代將軍の御墓をいかでか京都の馬の蹄にかくべき。唯今各々申切らるべし、宣旨に隨はんと思はれば、先づ尼を殺して鎌倉中を燒拂ひて後京へは參り給ふべし。

此の述懷を聞いて將士等は大に感激し、共に忠勤を勵まんことを誓つたのである。

即ち

爭でか三代將軍の御恩をば思ひ忘れ奉るべき。其上源氏は七代相傳の主君なり、子々孫々までも其御よしみを忘れ奉るべきにあらず。頓て明日打立て命を君にまゐらせて、首を西に向ひてかゝれ候はんずると申して一同に立ちにけり。

とある。源氏の恩を報ずるために生命をすつることを誓ひながら、朝家の御恩は忘れてゐる。七代相傳の主君は知りながら、先祖代々からの主君のことは忘れてゐる。又實際に於て源氏の恩を忘れぬならば、その源氏を亡ぼしたる北條の命令に從つて戰ふことの出來やう筈はないのに、さういふ點に就ての思慮分別は少しもない。彼等は忠義のために戰ふつもりであらうが、眞の忠義は全く辨へぬのである。是は其の思想の根柢が間違つてゐたからである。佛法が盛に弘まつてゐても、其の正しい意義を失つ

て居たからである。むかし聖德太子が人々をして私を去つて公に奉じ、國と君とに盡させんが爲に佛法を興隆せられたる御精神が全く世に埋もれてしまつたからである。

抑々承久はいかなる年號ぞや。玉體盡く西北の風に沒し、卿相みな東夷の鋒にあたる。天照太神正八幡の御はからひなり、王法此時かたぶき東國天下を行ふべき由緒にやありつらん。

とは承久記の著者の評であるが、王法を扶くべき佛法が正しく敎へられ正しく弘められて居たならば、此の如き出來事の起らう筈はないのである。日蓮上人の奮起したのも當然の事ではないか。

客聊和曰。未レ究二淵底一。數知二其趣一。但自二華洛一至二柳營一。釋門在二樞楗一。佛家在二棟梁一。然未レ進二勘狀一。不レ及二上奏一。汝以二賤身一輙吐二莠言一。其義有レ餘。其理無レ謂。

客聊か和ぎて曰く、未だ淵底を究めざるも數々其趣を知る。但だ華洛より柳營に至るまで、釋門に樞楗あり佛家に棟梁あり。然れども未だ勘狀を進めず上奏に及ばず。汝賤身を以て輙く莠言を吐く。其義餘有り、其理謂無し。

○淵底を究めず　奥深い所はまだ分らぬが、一通りの趣意は分つたといふこと。○華洛より柳營　華洛とは京都のことで、柳營とは幕府のことである。朝廷に於ても武家に於てもといふ意である。○樞楗　重要なる地位に居る人々のこと。○勘狀　敎理等を考へ合せて意見書を出すこと。○上奏に及ばず　法然の說が誤つてゐるならば諸宗の高僧の中から武家になり、朝廷になり其旨を申立つべきに今以て其事なきは不審であるといふのである。○莠言　莠とは稻に似たる惡草である。莠言とは理に當らざる不遜の言のこと。

日蓮上人が地位もなく勢力もない身を以て、當世の有力者の保護をも受けず、法華弘通の魁をするために起つたのは、いかにも無謀の事のやうに多くの人の眼には見られたことであらう。遠く奈良朝のむかしから、苟くも高僧碩德として世に聞えた人で權貴の人の保護を受けなかつたものは殆んど無い。例へば行基にせよ、傳敎弘法、慈覺智證等の人々にせよ、皆朝廷のあつい御保護もあり又大臣百官の歸依も至て厚かつた。法然上人は關白兼實に歸依せられ、榮西禪師は賴家實朝の二將軍に歸依せられ

た。その他の例は一々擧ぐるに暇ないほどである。その敎の汎く世に弘まつたのは固より其人自身の學德によるものであるが、斯る有力者の保護のあつたことも大なる助けとなつたに違ひない。然るに獨り日蓮上人は全く其の自身の力のみによつて法華經を弘めたのである。其の歸依者の中には富木とか四條とか上野とかいふやうな、然るべき武士もあつたけれども固より關白や將軍のやうに一世を動すべき勢力のあつた人達ではない。上人はたゞ法華經が必ず末法の世に弘まるべきものであるといふ一事を確信せるが故に、此の困難なる事業にその身を捧げたのである。

而るに日蓮は安房國東條片海の石中の賤民が子なり。威德なく有德の者にあらず。何につけてか南都北嶺のとゞめ難き、天子の虎牙の制止に叶はざる念佛をふせぐべきと思へども、經文を龜鑑と定め天台傳敎の指南を手に握りて、建長五年より今年文永七年に至るまで十七年が間是を責めたるに、日本國の念佛大體とゞまり了んぬ眼前に是れ見えたり。——善無畏三藏鈔

とは此の立正安國論の書かれてから十年經て後の述懷である。世俗の眼から見れば

『微賤の身』であるけれども、上人の自ら任ずる所は佛の御使として法華經を世に弘むることに在る。

斯る時刻に日蓮佛勅を蒙りて此土に生れけるこそ時の不祥なれ。法王の宣旨背き難ければ……如說修行鈔

といふ覺悟あつて初めて奮起したのである。

主人曰。予雖ㇾ爲二少量一。忝學二大乘一。蒼蠅附二驥尾一而渡二萬里一。碧蘿懸二松頭一而延二千尋一。弟子生二一佛之子一。事二諸經之王一。何見二佛法之衰微一。不ㇾ起二心情之哀惜一。其上涅槃經云。若善比丘。見二壞ㇾ法者一。置不二呵責駈遣擧處一。當ㇾ知是人佛法中怨。若能駈遣呵責擧處。是我弟子。眞聲聞也。余雖ㇾ不ㇾ爲二善比丘之身一。爲ㇾ遁二佛法中怨之責一。唯撮二大綱一。粗示二一端一。其上去元仁年中。自二延曆興福兩寺一。度度經二奏聞一。申二下勅宣御敎書一。法然之選擇印板。取二上大講堂一。爲ㇾ報二三世佛恩一。令ㇾ燒二失之一。於二法然墓所一。仰二付感神院犬神人一。令二破却一。其門弟隆觀聖光成覺薩生等。配二流遠國一。其後未ㇾ許二御勘氣一。豈未ㇾ進二勘狀一云也。

主人の曰く。予少量たりと雖も忝くも大乘を學す。蒼蠅驥尾に附して萬里を渡り碧蘿松頭に懸りて千尋を延ぶ。弟子一佛の子と生れて諸經の王に事ふ。何ぞ佛法の衰微を見て心情の哀惜を起さゞらん。其上涅槃經に云く、若し善比丘ありて、法を壞る者を見て置て呵責し駈遣し擧處せずんば、當に知るべし是人は佛法の中の怨なり。若し能く駈遣し呵責し擧處せば、是れ我が弟子、眞の聲聞なりと。余善比丘の身たらずと雖も、佛法の中の怨の責を遁れんが爲に、唯だ大綱を撮りて粗ぼ一端を示す。其上去る元仁年中に延曆興福の兩寺より度々奏聞を經、勅宣御敎書を申下して、法然の選擇の印板を大講堂に取上げ、三世の佛恩に報ぜんが爲に之を燒失せしむ。法然の墓所に於ては感神院の犬神人に仰付けて破却せしむ。其門弟隆觀聖光成覺薩生等は遠國に配流せらる。其後未だ御勘氣を許されず。豈に未だ勘狀を進めずと云はんや。

○蒼蠅驥尾に附し　蒼蠅は遠くまで飛ぶ力は無いが。良い馬の尾に取附いて居れば遠くまでも行かれる。蘿は細い草であるが高い松に纏ひつけば空高く延びて行かれる。凡夫でも大乘の經典によつて覺を得ることの出來ぬわけは無い。○一佛の子　釋尊を父として仰ぐのである。○諸經の王　法華經のことである。藥王品の中に『帝釋の三十三天の中に於て王たるが如く、此も亦た復た是の如し、諸經の中の王なり』とある。○呵責駈遣擧處　呵責とは其說の誤れるを說いて攻擊すること。駈遣とは其人を排斥して共に交らぬこと。擧處とは之に對して制裁を與へることである。○佛法の中の怨　たとへ自身の行ひには缺點がなくても、佛法の弘まる妨げを爲すものを棄て置けば、つまり其者に味方するに當るから、同じく佛法に敵對する者と見做さるべきである。○延曆興福の兩寺　延曆寺は叡山、興福寺は奈良の七大寺の一である。興福寺は中臣鎌足が山科に建てたのを後に奈良に移したので、此寺で行はるゝ維摩會は南都三大會の一である。○御敎書　關白又は將軍などから出る命令のことをいふ。○大講堂　叡山の大講堂である。法然はもと叡山の僧であつて、天台の敎義に背いたことを唱へ出したのであるから、其著書の板木を叡山に取上げて燒いたのである。○感神院の犬神人　感神院とは祇園の社のことである。此社に仕ふ

る者の中で特に身分卑く、不淨の事を取扱ふものを犬神人といふ。平生は弓の弦を作ることを家業とし、他の建物などを破却する時には其用を勤むるのである。

此處に引用せられたる涅槃經の文は、菩薩行のいかなるものなるかを知るに最も大なる力となるべきものである。たゞ吾が心に疑惑なく苦悶なくして過し得るを以て足れりとし、世間の人が如何に惱んで居ても進んで之を救はうといふ志の無いものは、眞の佛弟子とはいはれぬ。此の如きは大乘佛敎の精神を全く知らぬ徒である。大乘の佛敎は菩薩の道を敎ゆるものである。菩薩は佛の御心を以て吾が心として、修行を積んで行く者である。佛は洪大無邊の慈悲心を以て一切衆生に臨み、その苦を拔き其の惑を除かんが爲に敎を說かるゝので、『今此の三界は皆是れ我が有なり、其中の衆生は悉く是れ吾が子なり』と法華經の中に述べられた所が即ち佛の志とせらるゝ所である。吾が子の病に罹つたのを其儘に見て平氣で居ることは出來ぬ。又吾が子の誘惑にかゝつたのを見て之を覺醒せしむるために力を盡さずには居られぬ。菩薩は佛の御心を以て其心と爲す者であるから、衆生の邪說に惑はされて居るのを見ては、宛も自身の病を憂ふるが如くに之を憂へ、如何にもして覺醒せしめやうと心を碎くのである。若しも自ら大乘の敎を學ぶ者と稱しながら、世間に邪說の橫行するを見ても之を憂へず、世間の人を覺醒せしめやうともせぬならば、これは慈悲心の缺けたる人である。慈悲心の缺けたる人は、たとへ其の一身上に何の過失がなくても、佛法の根本精神に背くのでもあるから佛は之を許して置かれぬのである。それ故『佛法の中の怨なり』とまで極言して、之を嚴しく戒めらるゝのである。若し自ら進んで世間の邪說を排擊し、多くの人を覺醒せしむることに努むるならば、これこそ眞の佛弟子と稱せらるべきものである。但し此の如き態度に出るのには、大なる決心が必要である。其人の爲に攻擊せられた徒は必ず之を恨み之を憤つて、種々なる迫害を之に加ふるであらう。故に身命を惜まずして有らゆる迫害に堪ゆるだけの決心があつて初めて邪說を排ずることが出來るのである。多くの人の爲に自ら身命を擲つて起つのであるから、これを眞の菩薩行と稱すべきである。たゞ此處に『眞の聲聞なり』とあるのは少しく不思議なやうにも見える。聲聞とは小乘の敎によつて悟つたもので、たゞ一身に苦惱もなく

罪惡もないのに滿足し、進んで人のため世の爲に力を盡さうとはせぬ者である。しかし斯る小乘の徒が全く價値のないといふわけは無い。此に止つてしまつて此より以上の修行をせぬならば佛の御精神に叶はぬのであるが、聲聞の地位に滿足せずして更に菩薩行に入るならば、今までの修行は皆活きて來るのである。斯くてこそ聲聞の地位にまで達したかひがあるともいふべきである。故に菩薩行に努むることを擧げて『眞の聲聞なり』といはれたので、聲聞の境界を脫し得てこそ初めて眞の聲聞である。

法然上人の事は前にも度々いつたが、元來は天台宗の僧であつたのが後に自ら淨土宗を開いて專修念佛を唱へたのである。專修念佛といへば、阿彌陀佛を念ずる外の行を一切雜行として排斥するのであるから、從來弘まつた八宗を盡く敵とするやうになるのは自然の勢で、其等の諸宗から陰に陽に種々の壓迫を受けたのも據ないことである。元久元年に七箇條の制誡を作つて其の門徒を戒め世間の誤解を釋くに努めたのを見ても其の困難のさまはほゞ察せられる。斯ういふ事情から承元元年には土佐に流されたが、幾くもなく赦されて京都に歸り、その晩年は無事であつた。斯くて上人は建曆二年正月に八十歳を以て京都東山大谷の草庵に於て沒し、その東方の地に葬つた。

然るに其後に叡山や南都から上人の唱へた專修念佛は邪說であつて、今まで切角に弘まつた諸宗の敎を壞亂するものであるといふ事を度々奏聞したので、終に之に對して嚴しい制裁を加へらるゝことになつた。それで上人の沒後十五年にして嘉祿三年六月に至り、其の墓所を毀ち死骸を加茂河へ流されることになつた。その一切の處置は上人がもと叡山の僧徒であつた關係から延曆寺に於て引受ける事になり、祇園の犬神人を遣はして墓所を取り毀させ、遺骨を河に流した。而して其の著の選擇集は世間の人を惑はすものであるとの理由で其の版木を叡山に取り上げ之を燒き棄てたのである。

然るに淨土宗の方の傳說によると、祇園の犬神人が墓所に向つた時に內藤五郎兵衞尉等が生命に懸けて之を護つたので破却し得ずして退いた。其夜人々は竊かに遺骨を取出して他に隱し置き、翌年の正月末に至り西山の栗生野に於て荼毘に附して葬つたといふことである。何れの傳說が正しいのか、なほ研究を要すべき事であらうが、此處に日蓮上人が此の事實を引用したのは、法然の說の正しからぬことは獨り自分の主張

ばかりでなく、既に諸宗に於ても之を認め、朝廷に於ても之を認められた所であるといふ證據にせんが爲である。しかし此事はさして重大の意味をもたぬ。要するに末法の世の人が彌陀の他力に依らなければ救はれぬか、法華經によつて救はるゝか、是が主要の問題である。

客則和曰。下レ經謗レ僧。一人難レ論。然而以二大乘經六百三十七部。二千八百八十三卷。並一切諸佛菩薩。及諸世天等一。載二捨閉閣拋四字一。其詞勿論也。其文顯然也。守二此瑕瑾一。成二其誹謗一。迷而言歟。覺語歟。賢愚不レ辨。是非難レ定。但災難之起。因二選擇一之由。盛增二其詞一。彌談二其旨一。所詮天下泰平國土安穩。君臣所レ樂。土民所レ思也。夫國依レ法而昌。法因レ人而貴。國亡人滅。佛誰可レ崇。法誰可レ信哉。先祈二國家一。須レ立二佛法一。若消レ災止レ難。有レ術欲レ聞。

客則ち和ぎて曰く、經を下し僧を謗すること、一人として論じ難し。然れども大乘經六百三十七部、二千八百八十三卷、並に一切の諸佛菩薩、及び諸の世天等を以て、捨閉閣拋の四字を載す、其詞勿論なり、其文顯然なり。此の瑕瑾を守りて其の誹謗を成す。迷ひて言ふか、覺りて語るか、賢愚辨せず是非定め難し。但し災難の起るは選擇に因るの由、盛に其詞を增し彌々其旨を談ず。所詮天下泰平國土安穩は君臣の樂ふ所、土民の思ふ所なり。夫れ國は法に依りて昌へ、法は人に因りて貴し。國亡び人滅せば佛を誰か崇むべき、法を誰か信ずべきや。先ず國家を祈りて須らく佛法を立つべし。若し災を消し難を止むるに術あらば聞かんと欲す。

○其詞勿論　一切の大乘經を排斥したといふことは、選擇集を讀んで見れば勿論明に分る。○國は法に依り　皇室に於て佛敎の興隆に力を用ゐられたのも全く其爲である。佛法によつて人心を正しくすることが國の繁榮の元である。○法は人に因り　貴い法があつても之を弘むる人がなければ世に弘まらず、民心を正しくすることは出來ぬ。法華經の中に法師を稱して『如來の使』といふは之が爲である。

今此處に客の言として出て居るのが恐らく一般國民の要求する所であらう。何れの經が最も貴いのか、何れの宗派が最も正しいのか、一般の人々は辨別のつかぬ筈である。『賢愚辨せず、是非定め難し』といふが所謂僞らざる告白であらう。たゞ何人も望

む所は安穏平和の生活である。いかに佛が尊くても敎が高尙であつても、國が亡びて人々の生活が出來ぬやうになれば、信心のかひは無いわけである。たとへ希望を來世にかけて、現世は假の生活であるから何事も心にかけずに過せと敎へられても、日々の生活があまり苦しければ到底堪へられぬやうになるであらう。淨土眞宗を開いた親鸞上人の作の中にも、現世利益和讃といふものがあつて、

南無阿彌陀佛と唱ふれば、この世の利益きはもなし。

といひ、或はまた

南無阿彌陀佛と唱ふれば、四大天王もろ共に、夜晝つねに護りつゝ、よろづの惡鬼を近づけず。

といふやうな語が列ねてある。此等によつても現世の問題を全く閑却することの出來ぬのが、人の本性であるといふことは分るであらう。ところが現世の安穏は如何にして得られるかといふ事が問題なのである。眞面目に考へて見れば、人が集つて社會を作り國家を作るのであるから、社會の平和を望み國家の安穏を望むならば、人々が各自に其心を正しくして懸らなければならぬ筈である。しかし各自に反省して自身の行ひを愼むといふことは容易に出來にくいものである。それで自身の心を正しくする事には努めずして、專ら神佛の加護を得て毎日を安樂に又平和に送りたいといふ考へで信心をする者が多くなる。平安朝以來多くの寺や塔が建てられたのは公卿や武家の寄附によるのであるが、その寄附をした人は大概家の繁昌を祈ることが目的であつたのである。此等の人々の意を迎へて自分達の宗派の繁榮を謀ることにのみ沒頭した結果として、佛敎は人倫道德とは殆んど懸け離れて、たゞ御祈禱のみを主にするやうになつた。例へば何か天災でもあると多くの僧を集めて仁王經を讀誦せしめたが、仁王經によつて天災を攘ふのに、たゞ之を讀誦したゞけでは無意味である。仁王經の趣意は佛の正しい敎を基礎として國政を行へば其國が泰平に治まつて、天變地夭も無くなるといふのである。此處に力を用ゐずしてたゞ仁王經を讀誦したとて効驗のあらう筈はない。然るに斯ういふ愚な事が盛に行はれて來たのである。此處に心のつかぬ間は眞の意味に於ける佛法の興隆は出來ぬ。心を正しくすることを敎へぬ法師は、法師の名

を冐す資格のない者である。心を正しくすることに努めずして布施するものは、檀那といふ名を辱むるものである。斯る間違ひ切つた考への人々が集つて居ては、寺や塔が如何に多く建つても少しも慶すべき事とはいはれぬ。日蓮上人が『何ぞ佛法の衰微を見て心情の哀惜を起さゞらんや』といふのは、道理ある言である。上人の主張は即ち立正安國である。安國は何人も共に望む所であるが、立正によつて初めて安國の望みが達せらるゝことに考へ及ばぬ故に、いつ迄も其の望みがかなはぬのである。立正とは前にもいふ如く正法を立つることである。正法を立つるためには邪法を禁じなければならぬ。邪法を禁ずるは國を安んじ民を安んずる大慈悲の業である。

主人曰。余是頑愚。敢不レ存レ賢。唯就二經文一。聊述二所存一。抑治術之旨。內外之間。其文幾多。具難レ可レ擧。但入二佛道一。數回二愚案一。禁二謗法之人一。重二正道之侶一。國中安穩。天下泰平。即涅槃經云。佛言。唯除二一人一。餘一切施。皆可二讃歎一。純陀問言。云何名爲二唯除一人一。佛言。如二此經中所レ說破戒。純陀復言。我今未レ解。唯願說レ之。佛語二純陀一言。破戒者謂二一闡提一。其餘在所一切布施。皆可二讃歎一。獲二大果報一。純陀復問。一闡提者其義云何。佛言。純陀若有二比丘及比丘尼。優婆塞優婆夷一。發二麤惡言一誹二謗正法一。造二是重業一。永不二改悔一。心無二懺悔一。如レ是等人。名爲レ趣二向一闡提道一。若犯二四重一。作二五逆罪一。自知二定犯一。如レ是重事一。而心初無二怖畏懺悔一。不二肯發露一。於二彼正法一。永無二護惜建立之心一。毀呰輕賤。言多二過咎一。如レ是等人。亦名レ趣二向一闡提道一。唯除二如レ此一闡提輩一。施二其餘一者。一切讃歎。

主人の曰く、余は是れ頑愚にして敢て賢を存せず。唯だ經文に就て聊か所存を述べん。抑も治術の旨は內外の間其文幾多ぞや、具に擧ぐ可きこと難し。但し佛道に入りて數々愚案を回すに、謗法の人を禁めて正道の侶を重んぜば國中安穩にして天下泰平ならん。即ち涅槃經に云く、佛の言はく、唯だ一人を除いて餘の一切の施は皆讃歎すべし。純陀問ひて言さく、云何なるを名けて唯だ一人を除くと爲す。佛の言はく、此經の中に說く所の如きは破戒なり。純陀復た言さく、我今未だ解せず、唯だ願はくは之を說きたまへ。佛純陀に語りて言はく、破戒とは謂く一闡提なり。其餘の在所一切の布施は皆讃歎すべし、大果報を獲ん。純陀復た問ひたてまつ

る。一闡提とは其義云何。佛の言はく、純陀、若し比丘及び比丘尼、優婆塞優婆夷有りて麤惡の言を發し、正法を誹謗し、是の重業を造りて永く改悔せず、心に懺悔無からん。是の如き等の人を名けて一闡提の道に趣向すと爲す。若し四重を犯し五逆罪を作り、自ら定めて是の如き重事を犯すと知れども、而も心に初めより怖畏懺悔なく、肯て發露せず、彼の正法に於て永く護惜建立の心無く、毀呰輕賤して言に過咎多からん。是の如き等の人を亦た一闡提の道に趣向すと名く。唯だ此の如き一闡提の輩を除きて其餘に施さば、一切讃歎すべし。

○純陀　拘尸那城外の跋提河の邊に住んでゐた人で、釋尊は入滅の前に其家で供養を受け、その一族の爲に說法せられた。是れ實に最後の供養である。涅槃經の中に『純陀品』といふのがある。○一闡提　樂欲する者、又は極欲の義である。今こゝに說かるゝ所と、同じ涅槃經の梵王品に、『因果を信ぜず、慚愧あることなく、業報を信ぜず、現世及び未來世を見ず、善友に親まず、諸佛の所說の敎戒に隨はず、是の如き人を一闡提と名く』とあると相俟つて、一闡提の意義は明であらう。○其餘の在所一切の布施　一闡提の人に布施して其生命を續けさすのは、罪惡の種を養ふのであるから斷じて不可である。その他には如何なる者にでも布施するのが善根となる。○重業　至て重き惡業で、法華經には阿鼻獄に入ると說かれた程である。○四重　即ち四重禁のことで、種々の罪の元となるべき行として殊に嚴重に禁ぜらるゝのである。それは殺生と偸盜と邪婬と妄語とである。○發露　自ら其の犯した罪を　隱さずに懺悔するをいふ。○護惜建立　正法を擁護して其の隆昌ならぬことを憂ふるのが護惜である。建立とは之を弘めて基礎を固むることである。○毀呰輕賤　正法をそしり、又之を輕侮して尊重せぬことである。○趣向す　其方に向つて行くこと。一たび惡道に向へば、限りなく墮落して行くものである。

此の一段は眞の慈悲のいかなるものであるかを理解するために、極めて有益なる敎訓である。人を惠めば慈悲である、物を施せば慈悲であるといふやうな單純な考へでは決して世間を救ふことは出來ぬものである。世間に邪說を唱ふる者のあるのは譬へば身體に惡い瘡の出來たやうなもので、之を打棄て置けば全身に腐れが及ぶの恐れが

ある。故に少しも早く此の瘡を除かなければならぬ。邪說を唱へて世を惑はす人に布施して其の生活を續けさすのは、宛も瘡を養つて大きくするやうなものである。『謗法の人を禁じて正道の侶を重んずる』ことを天下泰平の元といふは之が爲である。凡そ罪過のある者に制裁を與ふるのには二つの目的がある。一は其の世間多數の人を惑はすのを防ぐ爲である。一は其人自身に反省を促さんが爲である。嚴しい制裁を與へられて世間から排斥されるのは、一時的には大なる不幸のやうであるけれども、之によつて自ら反省して正しい道に立戻ることが出來れば、一時の不幸が即ち將來の大なる幸福の元となる。されば之に對して制裁を與ふることが即ち慈悲の行である。いかなる惡人と雖も之を憎むべきではない。たゞ深く之を愍むが爲に嚴しい制裁を之に加へて其の反省を促すのである。此處に引かれたる涅槃經の文は、その制裁の一として布施を止むることを說いてある。凡夫が佛菩薩となるのは容易の業ではない。種々なる修行を重ね多くの歲月を費して、一歩より一歩と進んで行かなければならぬ。その間には種々の過を重ね罪を犯すこともあらう。しかし其の過失を自覺して之を悔ゐ改むる心があれば、久しく修行を重ぬる間には自ら過失も少くなり、周圍の人に善い感化を與へて行くことも出來るに違ひない。たゞ自ら正法に背離しながら之を罪と自覺せぬ者、飽くまでも其の非を遂げて懺悔する心のない者は、容易に救はれぬものであつて佛法とは非常に緣が遠いのである。此等を名けて一闡提の人といふ。此の如き輩が言を巧にして其の非を飾り世間の人を說き惑はさうとすると、世間には思慮の足らぬ者も少くないから、其言に惑はされて共に罪を重ぬるに至るのである。斯る一闡提の人に布施するはその罪を重ぬる因を作るやうなものである。之に對する布施を止めてその生活の續け得られぬやうにするのが、即ち其人自身に對しても慈悲である。世間の人を惑はすことを防遏するの功德はいふ迄もなく大なるものである。苟くも佛法の興隆を念とするものは、眼前の小事に囚はるゝことなく、永遠の事に着目しなければならぬ。

又云。我念二往昔一。於二閻浮提一作二大國王一。名曰二仙豫一。愛二念敬三重大乘經典一。其心純善。無レ有二麤惡嫉惱一。善男子。我於二爾時一。心重二大乘一。聞三婆羅門誹二謗方等一。聞已即

時斷二其命根一。善男子。以二是因緣一。從レ是已來不レ墮二地獄一。又云。如來昔爲二國王一。行二菩薩道一時。斷二絶爾所婆羅門命一。

又云く、我往昔を念ふに、閻浮提に於て大國の王と作り、名けて仙豫と曰ひき。大乘經典を愛念し敬重し、其心純善にして麤惡嫉惱有ること無し。善男子、我爾時に於て心に大乘を重んず。婆羅門の方等を誹謗するを聞き、聞き已りて即時に其の命根を斷ず。善男子、是の因緣を以て、是より已來地獄に墮せず。又云く、如來昔國王と爲りて菩薩の道を行ぜし時、爾所の婆羅門の命を斷絶す。

○麤惡嫉惱　其心の善に向はぬが爲にいつも自己の欲望にのみ專であつて、他の者を妬み、他に施すことを惜むのである。○方等を誹謗す　方等とは凡ての大乘經の眞理を闡明するものであるから即ち方等である。但し天台大師が一代五時を分つて說いた中の方等といふのは、これと別の意義である。○地獄に墮せず　正法を護るが爲に惡人に制裁を與へたる功德により、其後幾たびも生をかへても、地獄に墮つることは無かつた。

此の一段は釋尊が過去の世に於て、曾て國王として正法の流布に力を盡されたことを說かれたもので、即ち王法と佛法との冥合の必要なることを示されたのである。前にもいふ通り、大乘の佛敎は吾々の現世に於ける生活と離れたものでは無く、吾々の心の持ち方一つで此の娑婆世界を漸次に極樂淨土と變化せしむることも出來得べきことを敎へられたものである。吾々は各自に努力して此の敎を日々の生活の上に實現せんことを期すべきである。但し吾々は凡夫であるから、如何に努力するつもりでも日々に多くの過失が起つて來る。又種々の緣に惑かれて信心の退轉することを免れぬものである。それ故に相互に戒めあひ匡しあふことが最も肝要である。即ち嚴格なる社會制裁の存在することを必要とするのである。國王其他社會の上流に立つ人は身を以て衆を率ゐなければならぬ責任をもつて居る。故に自ら正しい信仰をもつて其心を固めて居るは勿論、一般人民の間に嚴格なる制裁の力の存するやうに常に指導して行かなければならぬ。若し邪法を唱へて世間の人を惑はすものがあれば少しも用捨せず

に、之に嚴重なる制裁を與へ其の毒の傳播することを防止しなければならぬ。此事に力を盡すのが即ち國王としての責任を完うする所以である。又これこそ眞の菩薩行といふべきである。斯る場合に際しては少しも躊躇すべきでない。經文に『聞き己りて即時にその命根を斷ず』とあるは、即ち其の決心のいかに牢乎たるものであつたかを示すに充分である。是れ實に一切衆生をして共に意義ある生活を送らしめんとの大慈悲心に出るものである。斯る功德を積めるによつて釋尊は佛身を成就することが出來たのである。

又云。殺有レ三。謂下中上。下者蟻子乃至一切畜生。唯除二菩薩示現生者一。以二下殺因緣一。墮二於地獄畜生餓鬼一。具受二下苦一。何以故。是諸畜生有二微善根一。是故殺者具受二罪報一。中殺者從二凡夫人一至二阿那含一。是名爲レ中。以二是業因一。墮二於地獄畜生餓鬼一。具受二中苦一。上殺者父母乃至阿羅漢。辟支佛。畢定菩薩。墮二於阿鼻大地獄中一。善男子。若有二能殺一闡提一者。則不レ墮二此三種殺中一。善男子。彼諸婆羅門等。一切皆是一闡提也。

又云く、殺に三有り、謂く下中上なり。下とは蟻子乃至一切の畜生なり。唯だ菩薩の示現生の者を除く。下の殺の因緣を以て地獄畜生餓鬼に墮して具に下の苦を受く。何を以ての故に。是の諸〻の畜生にも微善根有り、是故に殺す者は具に罪報を受く。中の殺とは凡夫の人より阿那含に至るまで、是を名けて中と爲す。是の業因を以て地獄畜生餓鬼に墮して具に中の苦を受く。上の殺とは父母乃至阿羅漢、辟支佛、畢定の菩薩なり。阿鼻大地獄の中に墮す。善男子、若し能く一闡提を殺すこと有らん者は則ち此の三種の殺の中に墮せず。善男子、彼の諸〻の婆羅門等は一切皆是れ一闡提なり。

○下中上　下とは罪の輕いもの、上とは最も重いものである。○示現生の者　菩薩が衆生を救ふために、特に畜生の姿に身をかへて居る者のこと、是は普通の畜生と同じに論ずることは勿論出來ぬ。○微善根　畜生と雖も佛性を具へてゐる、たゞ其力が至て微で現はれぬのみである。○阿那含　小乘の敎によつて覺を得るものが四種ある中の第二等のものである。前に委しく出てゐる。○阿羅漢　小乘の敎によつ

て覺を得た中では極位である。○辟支佛　譯して緣覺といふ。日々遭遇する所の種々の事の緣により、世の無常を觀じて煩惱を除き得たるものである。佛の說を聽いて同じく無常を觀じたるものを聲聞といひ、之を併せて二乘といふのである。上にいふ阿那含とか阿羅漢とかいふも聲聞の中の區別である。○畢定の菩薩　佛の大乘の敎によつて修行を重ねるのが即ち菩薩道である。菩薩道を修めて其心に全く惑なく、殆んど佛に等しい程度に達したものが畢定の菩薩である。○善男子　佛が說法を聽く人々を呼び懸けて『善男子よ』といはるゝのである。心を佛道に傾くるものは善男子である。○諸の婆羅門　釋尊の世に出られた時に九十五六の流派があつたといふほど、婆羅門敎が種々に分れて居たのである。

大乘の敎に於ても小乘の敎に於ても、殺生を大罪とせぬものはない。生命を奪ふといふ事と慈悲の念とは兩立せぬものであるから、嚴しく殺生を禁ずるのである。されば梵網經に大乘戒を說かれた中にも、十大罪の第一に殺生をあげて、

是れ菩薩は應に常住慈悲心孝順心を起し、方便して救護すべし。而るに反て更に自ら恣なる心と快き意をもて殺生するは、是れ菩薩の波羅夷罪なり。

とある。波羅夷罪とは重罪の義である。斯く殺生を重罪として禁ぜらるゝにも拘はらず、一闡提を殺すことを罪とせぬのは、殺生を以て自己の私心を滿足せしむる爲でなく、一切衆生を救はんが爲に之を殺すからである。即ち此の殺生こそは梵網經にいふ所の『常住慈悲心孝順心を起し方便して救護する』の意に合せるものである。而して其の殺された者も、一日永く生きて居るのはそれだけ多く罪を重ね、それだけ多く苦の因を作るわけであるから、疾く此生を終ることが却て幸といふべきである。假令その肉體は死しても眞の生命は不滅のものである。此世に於ける惡い緣を斷ち切つて、更に次の生に於て此の罪を償ふべきだけの苦を受け、然る後にはまた淨らかなる生活に入ることも出來るであらう。惡人に制裁を與へるのはその反省を促す爲であるといふことを前節に述べたが、若しその生命を現世に限らるゝものとすれば、之を殺すといふことは如何なる場合にも避くべきであらう。しかし三世を通じて一貫したる生命のあることを認むる以上は、之を殺すのが却て慈悲となることもよく了解せらるべき

である。

仁王經云。佛告二波斯匿王一。是故付二屬諸國王一。不レ付二屬比丘比丘尼一。何以故。無二王威力一。

仁王經に云く、佛波斯匿王に告げたまはく、是故に諸の國王に付屬して、比丘比丘尼に付屬せず。何を以ての故に。王の威力無ければなり。

○波斯匿王　舍衞國の王で、釋尊と同日に生れたといふ。武勇の王で戰へば必ず勝つといふ程であつたが、又道を求めて釋尊に歸依して居た。○國王に付屬し　佛法を世に弘むるために力を盡すべきことを國王に托せらるゝのである。○王の威力　王は凡ての人民を動す力がある故に、王の信ずる敎は一般に必ず之を重んずるものである。比丘比丘尼等にはその力がない。

正法を弘むるのと邪法を禁ずるのとは、相表裏して共に行はるべきもので、兩者相俟つて初めて國内の眞の平和と眞の幸福とを見らるべきである。法師は所謂『如來の使』として世に出て法を說くものであるから、正法を弘めて世の人をして之に依らしむべく力を盡すと共に、邪法の世を惑はすのを防ぐためにも力を用ゆべきこと勿論である。しかし其の邪法の徒が多勢を恃んで暴力に訴へて來る事などがあれば、之に對抗すべき道がないのである。若し國王が正法に歸依して居て、邪を塞ぎ惡を斥くるために力を用ゆることを辭せぬならば、正法の興隆は少しも困難でない。されば釋尊は此の大事を國王に托すると申されたのである。然るに邪說を唱へて世を惑はすほどの者は、人の意を迎へて巧みに說く事に長じて居る。それ故に多くは國王大臣の如き有力なる人々に取り入つて、その勢力を利用することに成功する。國王や大臣に私心私欲の盛な人があれば、必ず正法を聽くことを悅ばず、その意を迎へて說く所の者の言を悅び聽くが故に、正法の徒は迫害を受くるものである。釋尊が『國王に付屬す』と申されたのは、國王をして其の責任の大なることを自覺せしめ、一人の私によつて一國を誤るの罪の最も重いことを知らしめんが爲である。國王のみならず、社會の上流に立つ人は深く意をこゝに注がなければならぬ。

涅槃經云。今以二無上正法一。付二屬諸王大臣宰相。及四部衆一。毀二正法一者。大臣四部之

衆。應二當苦治一。又云。佛言。迦葉。以下能護二持正法一因緣上故。得レ成二就是金剛身一。善男子。護二持正法一者。不レ受二五戒一。不レ修二威儀一。應レ持二刀劍弓箭鉾槊一。又云。若有下受二持五戒一之者上。不レ得三名爲二大乘人一也。不レ受二五戒一、爲レ護二正法一。乃名二大乘一。護二正法一者。應三當執二持刀劍器仗一。雖レ持二刀杖一。我說二是等一。名曰二持戒一。

涅槃經に云く、今無上の正法を以て諸王大臣宰相、及び四部の衆に付屬す。正法を毀る者は、大臣四部の衆當に苦治すべし。又云く、佛の言はく、迦葉、能く正法を護持する因緣を以ての故に、是の金剛身を成就することを得たり。善男子、正法を護持せん者は五戒を受けず、威儀を修せずして、刀劍弓箭鉾槊を持すべし。又云く若し五戒を受持せん者有るも、名けて大乘の人と爲すことを得ず。五戒を受けざるも、正法を護ることを爲すを乃ち大乘と名く。正法を護る者は當に刀劍器仗を執持すべし。刀杖を持すと雖も、我是等を說き名けて持戒といはん。

○苦治すべし　之に制裁を與へて世の中に立てぬやうにしてやること。○是の金剛身　佛身のことをいふのである。如何なる物にも影響せらるゝ所が無いから、名けて金剛不壞といふ。釋尊が今佛となつたのは、過去の世に於て正法を護持するために力を盡したる功德によるといふのである。○五戒を受けず　殺生、偸盜、邪婬、妄語、飲酒は五戒として在家出家を問はず守るべきものとしてあるが、正法を護る爲に人を殺してもそれは戒に背いた者とはいはれぬのである。○威儀を修せず　佛弟子たるものは種々の儀式を守り禮節を具へなければならぬので、人を殺す如きは威儀を守るのと反對の事であるが、それを許されるのである。○器仗　弓箭等の兵器及び杖などである。○持戒といはん　戒を破るのも佛法の爲であるから、戒を嚴しく持つ人と同樣に貴い者なのである。

大乘の敎によつて修行を重ぬるものは即ち菩薩の道を行ずる者である。菩薩を譯して大士といふは大心を有するの士といふ意である。大心とは佛の境界に達せんことを志とするの謂である。佛は前にも屢々いふ如く、常に大慈悲心を以て衆生に臨みたまふのである。されば慈悲の心の缺けたものは、たとへ如何なる長所があつても到底佛の境界に達すべき者ではない。五戒を持つて少しも失の無いといふことは容易でない

が、斯る至難の事を能くしても、それだけでは大乘の人といふを得ぬわけである。能く正法を護ることに力を盡す人は、即ち一切衆生を救ふものであるが故に、即ち佛の意を以て己が意とするものといふべく、即ち大乘の徒と稱せらるべきである。正法を護るが爲に殺生するのは殺生戒に觸るゝものでない、その理由は前に委しく說いてある。但し斯ういふ事が說いてあるからとて、戒を持つことを無用の業のやうに思ふのは大なる誤りである。戒を守らずして殺生を行ふのは實に已むを得ざるに出るものである。即ち非常の時に際して非常の事を行ふものである。平生に於ては愼んで佛戒に違はざらんやうに努むべきは勿論のことで、若し此の心懸けが足らぬならば如何なる過失に陷らうかも知れぬ。天台大師は法華經の弘通に於て最も功勞のあること、何人もよく知る所であるが、而も大師の語としては

今時の僧衆戒律を以て心におかず、恐らくは佛法を滅しなん。——淨名經疏

聲聞の小行すらなほ木乂を珍敬す。大士の兼懷なる寧ぞ戒品を精持せざらんや。——

——梵網經疏

清淨に守護して明珠を愛するが如くせよ。若し毀犯する者は器の已に缺けたるが如くにして、用ゆるに堪ゆる所なし。佛法の邊人にして沙門釋子にあらず。——摩訶止觀

といふが如き嚴重なる戒めがある。されば一切衆生を救ふべき貴き業に身を委ぬる時にのみ限つて破戒を許さるべきもので、妄りに戒を破つて得々たる如き不心得のないやうにしなければならぬのである。此間の用意は尤も肝要である。

又云。善男子。過去之世。於此拘尸那城。有佛出世。號歡喜增益如來。佛涅槃後。正法住世無量億歲。餘四十年佛法末。爾時有一持戒比丘。名曰覺德。爾時多有破戒比丘。聞作是說。皆生惡心。執持刀杖。逼是法師。是時國王名曰有德。聞是事已。爲護法故。即便往至說法者所。與是破戒諸惡比丘。極共戰鬪。爾時說法者得免厄害。王於爾時。身被刀劍鋒槊之瘡。體無完處如芥子許。爾時覺德尋讚王言。善哉善哉。王今眞是護正法者。當來之世。此身當爲無量法器。王於是時。得聞法已。心大歡喜。尋即命終。生阿閦佛國。而爲彼佛作第一弟子。其王將從人民眷屬。有戰鬪者。有歡喜者。一切不退菩提之心。命終悉生阿閦

佛國一。覺德比丘。却後壽終。亦得レ往二生阿閦佛國一。而爲二彼佛一作二聲聞衆中第二弟子一。若有二正法欲レ盡時。應二當如レ是受持擁護一。迦葉。爾時王者則我身是。說法比丘迦葉佛是。迦葉。護二正法一者。得二如レ是無量果報一。以二是因緣一。我於二今日一。得二種々相一。以自莊嚴。成二法身不可壞身一。佛告二迦葉菩薩一。是故護レ法優婆塞等。應下執二持刀杖一擁護如上是。善男子。我涅槃後。濁惡之世。國土荒亂。互相抄掠。人民飢餓。爾時多有下爲二飢餓一故發心出家上。如レ是之人。名爲二禿人一。是禿人輩。見レ護二持正法一。驅逐令レ出。若殺若害。是故我今聽下持戒人。依下諸白衣持二刀杖一者上。以爲レ伴侶。雖レ持二刀杖一。我說二是等一。名曰二持戒一。雖レ持二刀杖一。不レ應レ斷レ命。

又云く、善男子、過去の世に、此の拘尸那城に於て佛の世に出たまふ有りき。歡喜增益如來と號けたてまつる。佛涅槃の後、正法世に住すること無量億歲なり。餘の四十年佛法の末、爾時に一の持戒の比丘有り、名けて覺德といふ。爾時に多く破戒の比丘有り。是の說を作すを聞きて皆惡心を生じ、刀杖を執持して是の法師を逼む。是時の國王を名けて有德といふ。是事を聞き已りて、護法の爲の故に便ち說法者の所に往至し、是の破戒の惡比丘と極めて共に戰鬪す。爾時に說法者は厄害を免るゝことを得たり。王爾時に於て身に刀劍鋒槊の瘡を被り、體に完き處は芥子の如き許も無し。爾時に覺德尋で王を讃めて言く、善哉善哉、王今眞に是れ正法を護る者なり。當來の世に此身當に無量の法器と爲るべしと。王是時に於て法を聞くことを得已りて、心大に歡喜し、尋で即ち命終して阿閦佛の國に生じ、而も彼の佛の爲に第二の弟子と作る。其王の將從人民眷屬の戰鬪すること有りし者、歡喜すること有りし者、一切菩提の心を退せず、命終して悉く阿閦佛の國に生ず。覺德比丘は却後壽終りて亦た阿閦佛の國に往生することを得、而も彼の佛の爲に聲聞衆の中の第二の弟子と作る。若し正法盡きんと欲すること有らん時には、當に是の如く受持擁護すべし。迦葉、爾時の王とは則ち我が身是なり。說法の比丘は迦葉佛是なり。迦葉、正法を護る者は是の如き等の無量の果報を得ん。是の因緣を以て、我今日に於て種々の相を得て以て自ら莊嚴し、法身不可壞の身を成ず。佛迦葉菩薩に告げたまはく、是故に法を護らん優婆塞等は刀杖を執持し擁護すること是の如くなる

べし。善男子、我涅槃の後濁惡の世に、國土荒亂し互に相抄掠し、人民飢餓せん。爾時に多く飢餓の爲の故に發心出家するもの有らん。是の如きの人を名けて禿人と爲す。是の禿人の輩、正法を護持するを見て駈逐して出さしめ、若は殺し若は害せん。是故に我今持戒の人、諸の白衣の刀杖を持する者に依りて以て伴侶と爲すことを聽す。刀杖を持すと雖も、我是等を說き名けて持戒といはん。刀杖を持すと雖も命を斷ずべからず。

○餘の四十年佛法の末　佛の正法が世に行はれて居る間の、最後の四十年間のことである。○是說を作すを　覺德比丘が佛の正法を說き、持戒の大切なことを說くのを聽いて、自分達を攻擊する者の如くに思つて、敵意を生じたのである。○說法者　即ち覺德比丘のことである。○芥子の如き許　滿身に傷を負うたことを形容して、芥子ほども完全な肌はないといふのである。○當來の世　今は死んでも次の世に於ては其報を受けて聖者と生れやうといふのである。○無量の法器　法を世に弘むる大任に當る人を法器といふ。非常に偉大なる力を具ふべき故に無量の法器といふのである。○阿閦佛　法華經によれば大通智勝佛の十六人の王子の第一、智積王子といふのが修行を積んで佛となつたものである。維摩居士も前の世に此佛の弟子であつたといつて居る。○迦葉佛　釋迦如來より以前に世に出て法を說かれたる佛の中で、重なるものを過去の七佛といふのであるが、迦葉佛は其の一である。○種々の相　佛は三十二相を具へて居らるゝといふのである。○不可壞の身　金剛不壞といふも同じことで、如何なる物にも侵されず動されぬのである。○迦葉菩薩　十大弟子の一人たる迦葉とは別人である。涅槃經は主として此の迦葉菩薩に對して說かれたものである。○禿人　頭を剃つて居るばかりで、心は煩惱に充ちてゐるから禿人といふのである。○駈逐して出さしめ　正法を護る者を駈逐して其所を去らしむるのである。

佛が一切衆生を救はんが爲に世に出て法を說きたまへる慈悲心は、まことに洪大無邊なものである。此の洪大なる慈悲に感激して、斯る貴い法を世に弘むる爲には身命を惜まぬといふ決心を有する法師が現はれ、又此の法師を保護して法を弘めさするた

めに、自身も生命を擲つ覺悟を以て力を盡す王者が現はるゝ時には、其國は必ず平和と幸福とを以て充さるべきである。實に覺德比丘と有德王との如きは其の典型的なる人々といふべきである。日蓮上人が此國に法華經の汎く流布すべき時を豫想して、

有德王覺德比丘のその乃往を末法濁惡の未來に移さん時。——三大秘法禀承事

といつたのも尤もな事である。有德王と覺德比丘とのむかしが再び實現せらるゝならば、いかなる濁惡の世も變化して、光り輝くやうな國を見ることが出來るに違ひない。彼の有德王は邪法の徒を退治することに全力を注いだのであるが、斯る邪法の徒は一切衆生を救はんとする慈悲心なきものである。その出家して佛に仕へ經を誦するのは、たゞ之を職業として自己の生命を支へ、自己の名譽心を滿足せしめんが爲に過ぎぬのである。涅槃經の文に『飢餓の爲の故に發心出家する者』とあるはまことに痛切なる言である。日蓮上人の松野殿への消息の中に、

末世には狗犬の僧尼は恒沙の如しと佛は說かせ給ひて候なり。文の意は末世の僧比丘尼は名聞名利に著し、上には袈裟衣を著たれば形は僧比丘尼に似たれども、內心には邪見の劍を提げて、我が出入する檀那の所へ餘の僧尼を寄せじと無量の讒言を致し、餘の僧尼を寄せずして檀那を惜まん事、譬へば犬が前に人の家に至りて物を得て食ふが、後に犬の來るを見ていがみ吠る食ひあふが如くなるべしといふ心也。是の如きの僧尼は皆々惡道に墮すべきなり。

と憤慨し、なほ其の門下を戒めて、

人久しといへども百年には過ぎず。其間の事はたゞ一睡の夢ぞかし。受け難き人身を得てたま〳〵出家せる者も、佛法を學し謗法の者を責めずして、徒らに遊戲雜談のみして明し暮さん者は法師の皮を着たる畜生なり。法師の名を借りて世を渡り身を養ふといへども法師となる義は一もなし、法師と云ふ名字をぬすめる盜人なり。恥づべし恐るべし。迹門には我不愛身命、但惜無上道と說き、本門には不自惜身命と說き、涅槃經には身輕法重、死身弘法と見えたり。本迹兩門涅槃經共に身命を捨て法を弘むべしと見えたり。此等の禁を背く重罪は目には見えざれども積りて地獄に墮つる事、譬へは寒熱の姿形もなく眼には見えざれども、冬は寒來りて草木人畜

をせめ夏は熱來りて人畜を熱惱せしむるが如くなるべし。

といつたが、最も服膺すべき言と思はれる。何か惡疫でも流行すると、その撲滅には非常なる努力が費されるけれども、不健全なる思想を防遏するについて必死の努力をする人は少い。しかし深く考へて見ると、知らず識らずの間に國民の心を侵蝕する惡思想ほど恐ろしいものはない。惡疫によつて亡びた國はないが、國民の心が腐つて亡びた國は古今共に少からずある。互ひに深く心を此に致さなければならぬ。

法華經云。若人不レ信。毀二謗此經一。即斷二一切世間佛種一。乃至其人命終。入二阿鼻獄一。

法華經に云く、若し人信ぜずして此經を毀謗せば、即ち一切世間の佛種を斷ぜん。乃至、其人命終して阿鼻獄に入らん。

○法華經　この文は譬諭品の偈の中にある。○此經を毀謗　言に出して謗るのみならず、此經の弘まる妨げをするのは皆毀謗である○佛種を斷ぜん　法華經を信ずる者がなくなれば、佛になる者は無くなるのである。○阿鼻獄　無間地獄のことである。苦を受くること間斷なき故に無間地獄と名くるので八大地獄の最底である。

人々皆佛性ありといふことは今までにも屢々說いた所であるが、佛の境界に近づき得る人は殆んど稀である。それは其の具有せる佛性を養つて長ぜしむべき道を得ぬからである。たとへ佛性があつても養はなければ長ずることは出來ぬ。譬へば石の上へ種を播いても芽を生じ葉を出すといふことはない。土の中へ播いて水をそゝぎ暖い日の光りに當て、はじめて芽も葉も生ずるのである。されば之を養ふべき道を失へば、佛となるべき種は即ち絶えてしまふわけである。『佛種を斷ずる』といふはこの事である。法華經の方便品には『佛種は緣に從ひて生ず』とある。緣とは即ち善き敎法のことである。人々は皆自ら佛の境界にも到達し得べき貴い本性をもつて居ることを考へて、深く自ら重んじ自ら敬ぶと共に、他の凡ての人をも重んじ且敬ひ、自ら正しい敎法を求むることに努むるのみならず、他の人を導いて共に正しい道に入らしめなければならぬ。然るに若し正しい敎法を信ぜずして之を毀謗するならば、自ら永く佛と成るべき道を塞ぐのみならず、周圍の人々に惡い感化を與へ、その正しい道に入ることを妨ぐることになるから、其の罪は非常に大なるものである。其の罪の報として無間

地獄にも墮つべきである。各自に相戒めて斯る大罪に遠ざかるやうに努めなければならぬ。

夫經文顯然。私詞何加。凡如二法華經一者。謗二大乘經典一者。勝二無量五逆故一。墮二阿鼻大城一。永無二出期一。如二涅槃經一者。設許二五逆之供一。不レ許二謗法之施一。殺二蟻子一者。必落二三惡道一。禁二謗法者一。定登二不退位一。所レ謂覺德者。是迦葉佛。有德者。則釋迦文也。法華涅槃之經敎者。一代五時之肝心也。其禁實重。誰不二歸仰一哉。而謗法之族。忘二正道之人一。剩依二法然之選擇一。彌增二愚癡之盲瞽一。是以或忍二彼遺體一。而露二木畫之像一。或信二其妄說一。而彫二莠言之模一。弘二之海內一。翫二之廊外一。所レ仰則其家風。所レ施則其門弟。然間或切二釋迦之手指一。結二彌陀之印相一。或改二東方如來之鴈宇一。居二西土敎主之鷲王一。或止二四百餘回之如法經一。成二西方淨土之三部經一。或停二天台大師講一。爲二善導講一。如レ此群類。其誠難レ盡。是非二破佛一哉。是非二破法一哉。是非二破僧一哉。此邪義則依二選擇一也。嗟呼悲哉背二如來誠諦之禁言一。哀矣隨二愚侶迷惑麤語一。早思二天下之靜謐一者。須レ斷二國中之謗法一矣。

夫れ經文顯然たり、私の詞何ぞ加へん。凡そ法華經の如くんば、大乘經典を謗する者は無量の五逆に勝れたり。故に阿鼻大城に墮ちて永く出るの期無けん。涅槃經の如くんば、設ひ五逆の供を許すとも、謗法の施を許さず。蟻子を殺す者は必ず三惡道に落つ。謗法を禁ずる者は定めて不退の位に登る。所謂覺德とは是れ迦葉佛なり。有德とは則ち釋迦文なり。法華涅槃の經敎は一代五時の肝心なり。其禁實に重し、誰か歸仰せざらんや。而るに謗法の族、正道の人を忘れ、剩へ法然の選擇に依りて彌々愚癡の盲瞽を增す。是を以て或は彼の遺體を忍びて木畫の像に露はし、或は其の妄說を信じて莠言の模に彫り、之を海內に弘め、之を廊外に翫ぶ。仰ぐ所は則ち其の家風、施す所は則ち其の門弟なり。然る間或は釋迦の手指を切りて彌陀の印相を結び、或は東方如來の鴈宇を改めて西土敎主の鷲王を居え、或は四百餘回の如法經を止めて西方淨土の三部經と成し、或は天台大師の講を停めて善導の講と爲す。此の如き群類其れ誠に盡し難し。是れ破佛に非ずや、是れ破法に非ずや、是れ破僧に非ずや。此の邪義則ち選擇に依るなり。嗟呼悲しい哉如來誠諦の禁言に

背くこと。哀なる哉愚侶迷惑の麤語に隨ふこと。早く天下の靜謐を思はゞ須らく國中の謗法を斷つべし。

○五逆の供　五逆の徒に供養をすること。　○不退の位　大乘の敎を信じて退轉することの無い地位である。退轉しなければ後には佛の境界にも達することが出來るのである。○彼の遺體を忍びて　法然上人を追慕するの餘りに、其の姿を畫にかいたり像に彫つたりして後に傳へたのである。　○模に彫り　書物として出版したことである。○其の家風　法然一派の風、即ち念佛を專にすることをいふ。○釋迦の手指を切り　諸佛の像は皆其の指の結び方がちがふので、之を印相といふのである。然るに阿彌陀佛の信仰が全國に弘まると共に、釋迦牟尼佛の像の手だけを切取り、それに阿彌陀佛の印相の手を取附けることが流行したのである。○東方如來の雁宇藥師如來の堂のことである。堂の屋根が四方に垂れて居ることは雁の翼の如くである故に雁宇といふのである。○西土敎主の鷲王　阿彌陀佛の像のことである。三十二相の中に手足縵網相といふのがある。手足の紋網が鷲鳥の足の紋網の如くなので涅槃經に『四攝法を修して衆生を攝取す。是の緣業を以て縵網の指の白鷲王の如なるを得』とある。之によつて佛を鷲王といふ。○四百餘回の如法經　法華經　を書寫して供養とすることを如法經と稱するので、これは慈覺大師が天長年中に初めたのである。爾來法華經の書寫といふことは盛に行はれて、この文應元年まで四百餘年になる。○西方淨土の三部經　此頃になつては淨土の三部經を書寫することのみが盛になつた。○天台大師の講　天台大師の命日たる十一月二十四日に法會を營み、法華經を講ずることは叡山に於ける年中行事中の重なるもので、叡山以外にも汎く行はれて居たのである。又略して單に大師講と稱した。○善導の講　善導和尙の命日に法會を營むのである。○誠諦　眞實にして決して違ふこと無きをいふ。

法華經が最勝の經であることは屢々說いたが、なほ其意を明にするためには天台大師が、初めて說いた所の一代五時の關係を一通り明にして置かなければならぬ。佛敎が支那に傳はつてから五百餘年を經て、陳の代に至つて天台大師が出た。大師は一切經を讀破して釋尊の本意の在る所を究め、法華經が諸經の王たることを知ると共に、

涅槃經は畢竟法華經の意を敷衍したものに過ぎぬことをも知つた。而して釋尊の一代五十年間の說法を組織的に考察して、之を五つの時期に區分した。即ち

第一、華嚴の時——乳味
第二、阿含の時——酪味
第三、方等の時——生蘇
第四、般若の時——熟蘇
第五、法華涅槃の時——醍醐

右の如くである。最初釋尊が悟りを開いて山を出られた時に、直ちに說かれたものが即ち華嚴である。華嚴とは華を以て飾るの義で、華とに佛の具有したまへる德に譬へたのである。されば華嚴とは最も高く美しき德を具へられたる佛身を稱するのである。華嚴の敎は『佛とはいかなるものであるか』を說き顯はさんが爲である。然るに一切衆生は皆佛性を具有しながら之を自覺せず、常に煩惱の爲に役せられて、意義のない生活を送つて居る。之を佛道に入らしめんが爲には、先づ彼等の生活の全く價値なきことを自覺せしむる事が必要である。因て第二の時に於て阿含を說かれたのである。阿含の敎は即ち小乘の敎である。阿含といふは『等歸』と譯すので、萬法等しく之に歸するの意である。即ち衆生の有する一切の煩惱も、またその煩惱を脫すべき有らゆる道も皆此中に悉されてあるから、之を等歸と名くるのである。但し前にも屢々いふ如く、佛法は各個人の苦を除き惑を去らしむるのみを目的とするものではない。更に進んで世をも人をも救ふべき德を具有せしむることを目的として敎を說かれたものが即ち大乘敎である。此小乘より大乘に入るべき中間の敎が第三の方等といふ中に悉く含まれてゐる。是は小乘の徒（即ち聲聞と緣覺）にも大乘の徒（即ち菩薩）にも、雙方に亘つて共に必要なる敎である故に方等と名けらるゝのである。次に大乘の敎に入つて、先づ一切の差別を超越したる平等の原理を說かれたのが即ち般若である。般若とは空智のこと、空とは即ち平等の義である。而して終に一切衆生をして共に佛の境界に達せしむべき究竟の道を說示されたのが即ち第五の時たる法華である。されば此の法華の敎によつて、華嚴も阿含も方等も般若も皆其意義を有することになるのである。若し一切衆生の共に佛と成るべき道が指示されぬならば、いかに佛の貴いこと

を說かれても、又いかに衆生の境界の淺ましいことを指摘されても、畢竟その意義を有せぬことになるであらう。日蓮上人が

一切經の中に此壽量品ましまさずは、天に日月の、國に大王の、山河に珠の、人にたましひの無からんが如くしてあるべき。——開目鈔

と斷言したるはまことに道理である。

それ故に此の法華經を醍醐に比するのである。印度では牛乳を元にして酒を作つたのであるが、その酒の最上なるものが即ち醍醐である。釋尊が最初に華嚴を說かれてから、最後に法華涅槃を說かれた迄の五十年間を、牛乳よりして醍醐を作り上げるまでに譬へて、之を五味と名けてある。先づ牛乳を製して牛酪とし、更に之を生蘇とする。生蘇とは至て麁製の酒である。更に之を精製したるものが熟蘇であつて、精製の極に達したものが即ち醍醐である。天台大師はまた釋尊の敎を以て太陽の光りが世間の闇を照すのに譬へ、華嚴の時を日光の高山を照すに比し、阿含の時をその幽谷を照すに比し、方等以下の時をその平地を照すに比し、殊に法華涅槃の時は日が正に南に中して遍く凡ての物を照すが如くであるといつて居る。

法華經の貴いことはその以前からも知らぬ者は無かつたが、天台大師の出るに及んで其の一切經中に於ける地位が初めて確定したのである。然るに吾朝に於ては聖德太子が佛法を興隆せらるゝに當つて、諸經の中から法華經と維摩經と勝鬘經とを擇み出して朝廷百官のために講ぜられ、又其の義疏を作つて後世に遺された。太子は推古天皇の二十九年に四十九歲を以て薨ぜられ、天台大師はそれよりも二十四年前の、隋文帝開皇十七年に六十歲を以て遷化した。されば大師の方が三十餘歲の年長なのであるが、太子は天台の書を少しも見られなかつたやうである。而も彼の三經の中に於ても特に法華經を重く視られたのは歷然たる事である。まことに聖智の照す所相一致したるものとも申すべく、有難くも貴い次第である。其後傳敎大師の出るに及んで、法華經の最勝なることは、諸宗の共に承服する所となつた。(此事は前に委しくある。)此等の事を凡て無視して、たゞ世が末世に及んで人の機根が低くなつたといふ理由のみを盾にして、有らゆる佛菩薩と有らゆる經論を排斥し、念佛のみを勸むるといふは思は

ざるの甚しきものである。日蓮上人の奮起したのは決して偶然ではない。

客曰。若斷二謗法之輩一若絶二佛禁之違一者。如二彼經文一。可レ行二斬罪一歟。若然者殺害相加。罪業何爲哉。則大集經云。剃レ頭著二袈裟一。持戒及毀戒。天人可レ供二養彼一。則爲供二養我一。是我子。若有レ撾二打彼一。則爲打二我子一。若罵二辱彼一。則爲毀二辱我一。料知不レ論二善惡一。無レ擇二是非一。於レ爲二僧侶一。可レ展二供養一。何打二辱其子一。忝悲二哀其父一。彼竹杖之害二目連尊者一也。永沈二無間之底一。提婆達多之殺二蓮華比丘尼一也。久咽二阿鼻之焔一。先證斯明。後昆最恐。似レ誡二謗法一。既破二禁言一。此事難レ信。如何得レ意。

客の曰く、若し謗法の載を斷じ、若し佛禁の違を絶たんには、彼の經文の如く斬罪に行ふ可きか。若し然らば殺害相加へ罪業何か爲んや。則ち大集經に云く、頭を剃り袈裟を著せば、持戒及び毀戒をも天人彼を供養す可し。則ち爲れ我を供養するなり。是れ我が子。若し彼を撾打すること有れば、則ち爲れ我が子を打つなり。若し彼を罵辱せば、則ち爲れ我を毀辱するなりと。料り知んぬ、善惡を論ぜず是非を擇むこと無く、僧侶たるに於ては供養を展ぶべし。何ぞ其子を打ち辱めて忝くも其父を悲哀せしめんや、彼の竹杖の目連尊者を害せしや、永く無限の底に沈み、提婆達多の蓮華比丘尼を殺せしや、久しく阿鼻の焔に咽ぶ。先證斯れ明なり、後昆最も恐あり。謗法を誡むるに似て既に禁言を破る。此事信じ難し、如何か意を得ん。

○彼の經文の如く　涅槃經の中にある、仙豫王が婆羅門を殺した例に從ひ、多くの僧を殺すべきかとの疑問である。○我を供養す　釋尊が『我』と申されのである。○竹杖　釋尊當時の婆羅門の一派に竹杖を持つて歩くものがあつた。これを呼んで竹杖外道といふ。佛敎の弘まることを嫉んで、種々の迫害を加へたのである。○目連尊者　目連は最初婆羅門の學者であつたが、舍利弗と共に佛門に歸して十大弟子の一人となり、神通第一と稱せられた。竹杖外道の爲に打殺されたが、是れ前生の罪を滅する爲であるとて、少しも恨むことなく死に就いた。○提婆達多　釋尊の徒弟で初めは佛弟子となつてゐたが、後に背いて自ら一派を成し盛に釋尊と諸弟子とに迫害を加へた。○蓮華比丘尼　提婆達多が阿闍世王の城に入らんとして遮られ、

大に怒つて罵詈した時に、出て之を呵責した爲に提婆愈々怒り、拳を以て其頭を打て殺したのである。○後昆　後世の人といふ意に用ゐてある。○禁言　出家の者を佛の子と視て大切にせよといふ語のこと。○此事信じ難し　念佛の僧等を殺して宜いといふことは信じ難い。

此より彼の謗法の僧等にいかなる制裁を加ふべきかの問題を決するために、また一段の問答を設けたのである。日蓮上人は正義を主張するに當つて少しも憚る所なく、權貴をも恐れず威力にも屈せぬ人であつたが、決して實行し難い空論を陳ねて自ら快しとすることは無かつた。彼の龍の口法難の數日前に、幕府へ召喚せられて尋問を受けたことを、上人の自ら記せる所によると、

さりし程に念佛者持齋眞言師等、自身の智は及ばず訴狀も叶はざれば、上臈尼御前たちにとりつきて種々に構へ申す。故最明寺入道殿、極樂寺入道殿を無間地獄に墮ちたりと申し、建長寺壽福寺極樂寺長樂寺大佛寺等を燒拂へと申し、道隆上人、良觀上人等を頸はねよと申す。御評定に何となくとも日蓮が罪科まぬかれ難し、但し上件の事一定申すかと、召出して尋ねらるべしとて召出されぬ。奉行人の云く、上の仰せ此の如しと申せしかば、上件の事一言もたがはず申す。但し最明寺殿極樂寺殿を地獄といふ事はそらごとなり。此法門は最明寺殿極樂寺殿御存生の時より申せし事なり。詮ずるところ上件の事共は此國を思ひて申す事なれば、世を安穩にたもたんと思さば彼の法師ばらを召合せて聞しめせ。さなくして彼等に代りて理不盡に失に行はるゝほどならば國に後悔ありて、日蓮御勘氣を蒙らば佛の御使を用ゐぬになるべし。梵天帝釋日月四天の御咎めありて、遠流死罪の後百日一年三年七年が內に自界叛逆難とて此御一門同士打はじまるべし。其後は他國侵逼難とて四方より、ことには西方より攻められさせ給ふべし。其時後悔あるべし平左衞門尉と申し付けしかども、太政の人道の狂ひしやうに少しも憚る事なく物にくるふ。——種々御振舞御書

とある。之によつて見れば、諸寺を燒き拂ひ諸寺の高僧を殺せと主張して居たといふのは事實かとの尋問に對して、上人は之を認めて居るのである。しかし此等の語は皆

當路者を激勵せんが爲に發せられたるもので、上人がさういふ殺伐なことを實行しやうと計畫して居たわけでは無い。要するに邪說の橫行を完全に防遏することが出來れば、それで上人の目的は達せられるゝのである。それには世間の人が皆之に歸依することを止めて、布施を一切やめてしまへば宜いのである。是が最も實行し易くて、而も最も有効なる方法である。即ち次の段に於て述ぶる通りである。

主人云。客明見二經文一。猶成二斯言一。心之不レ及歟。理之不レ通歟。全非レ禁二佛子一。唯偏惡二謗法一也。夫釋迦之以前佛敎者。雖レ斬二其罪一。能忍之以後經說者。則止二其施一。然則四海萬邦。一切四衆。不レ施二其惡一。皆歸二此善一。何難並起。何災競來矣。

主人の云く、客明に經文を見て猶ほ斯言を成す。心の及ばざるか、理の通せざるか。全く佛子を禁むるに非ず、唯だ偏に謗法を惡むなり。夫れ釋迦の以前の佛敎は其罪を斬ると雖も、能忍の以後の經論は則ち其施を止む。然れば則ち四海萬邦一切の四衆、其の惡に施さずして皆此の善に歸せば、何なる難か並び起り、何なる災か競ひ來らん。

○偏に謗法を惡む　謗法の者は佛の弟子とはいはれぬから之を惡むのである。佛の弟子たる者を排斥する精神ではない。○其罪を斬る　罪ある者を斬ること仙豫王の如くである。○能忍　釋迦を漢譯して能忍といふ、或はまた能仁ともいふ。○其施を止む　正法に背いた者には布施することを止めるのである。誰も布施する者が無ければ、其の一派は自滅するの外はない。殺さずとも自ら其の活動は止むわけである。○四衆　四部といふも同じことで、即ち比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷のことである。○其の惡　誤れる法を弘むる者のこと。○此の善　釋尊の本意に叶つたる法を弘むる者のこと。

是は邪法の世に行はるゝを防ぐべき最も適切なる方法である。若し邪法の徒が暴力に訴へて正法の流通を妨ぐるならば、之に對して干戈を執ることも亦た已むを得ぬ所である。即ち有德王の事の如きは其の好適例である。しかし人の生命を絕ち、世間に紛擾を起すことは出來得る限り避けなければならぬ。それ故に日蓮上人當時に於ては必ずしも有德王の事蹟に習ふには及ばず、たゞ其の精神を學べば充分である。即ち諸

宗の僧に對する布施を止むることが最も簡單にして而も最も有効なる方法である。出家の人は自ら生計を立つる道を有せず、たゞ歸依する人々の布施によつて其の衣食の資を得るのである。されば布施する人が無くなれば、生活は出來ぬわけである。勿論正法を弘むることを志とするものは所謂不惜身命の決心をもつて居るから、固より華美なる生活を欲する者では無い。しかし邪法を弘めて世間の有力者の歸依を得やうと努むる者は元來名利の念の熾な徒であつて、法華經に

利養に貪著するが故に白衣のために法を說き、世に恭敬せらるゝこと六通の羅漢の如くならん。――勸持品

とあるのが即ち其の實情である。外面には淸廉無欲を裝つて居ても、法を弘めんが爲に一身を犧牲にするだけの決心があるのでは無い。されば之に對して布施する人がなくなり、衣食の資に窮するやうになれば、忽ちにして其の志を變ずるに違ひないのである。斯くして邪說は必ず屏息すべきである。故に國民の多數が覺醒して、その歸依を止むることが最も肝要である。但し其の說く所の邪法であるか正法であるかを見分

けることは、通常の人には頗る困難であるかも知れぬ。しかし自ら高德の法師なるが如くに裝つても、世を濟ふことも人を益することも出來ぬのは、僞り者にちがひ無いのである。例へば極樂寺の良觀の如きは、當時に於て高僧として上下萬民の歸依を得たものであるが、文永八年の夏の旱魃續きに、北條氏の命によつて雨を祈つたが、六月十八日から七月四日まで祈つても其の驗なく、日蓮上人が使を遣はして、

一丈の堀を越えぬもの十丈二十丈の堀を越うべきか。和泉式部いろごのみの身にして、八齋戒にせいせる歌をよみて雨をふらし、能因法師が破戒の身として、歌をよみて天雨を下らせしに、いかに二百五十戒の人々百千人集りて七日二七日せめさせ給ふに、雨のふらざる上に大風は吹き候ぞ。これを以て存ぜさせ給へ、各々の往生は叶ふまじきぞ。――種々御振舞御書

と責められても一言の返辭も出來なかつた。此の如くに、その日常の行ひによつて之を判ずれば、決して欺かるべきものでは無いのである。

客則避レ席刷レ襟曰。佛敎斯區。旨趣難レ窮。不審多端。理非不レ明。但法然聖人選擇現

在也。以二諸佛諸經諸菩薩諸天等一。載二捨閉閣拋一。其文顯然也。因レ茲聖人去レ國。善神捨レ所。天下飢渴。世上疫病。今主人廣引二經文一。明示二理非一。故妄執既醐。耳目數朗。所詮國土泰平天下安穩。自二一人一至二萬民一。所レ好也所レ樂也。早止二一闡提之施一。永致二衆僧尼之供一。收二佛海之白浪一。截二法山之綠林一。世成二義農之世一。國爲二唐虞之國一。然後斟二酌法水之淺深一。崇二重佛家之棟梁一矣。

客則ち席を避け襟を刷ひて曰く、佛敎斯れ區にして旨趣窮め難く、不審多端にして理非明ならず。但し法然聖人の選擇は現在なり。諸佛諸經諸菩薩諸天等を以て捨閉閣拋を載す、其文顯然なり。茲に因て聖人國を去り善神所を捨て、天下飢渴し世上疫病すと。今主人廣く經文を引き明に理非を示す。故に妄執既に醐り耳目數々朗なり。所詮國土泰平天下安穩は一人より萬民に至るまで、好する所なり樂ふ所なり。早く一闡提の施を止め、永く衆の僧尼の供を致し、佛海の白浪を收め法山の綠林を截らば、世は義農の世となり、國は唐虞の國と爲らん。然して後に法水の淺深を斟酌し、佛家の棟梁を崇重せん。

○一人より　上に在る一人、即ち帝王のことである。○佛海の白浪　後漢の末に白波の賊が起つた故事により、賊の事を白波とも白浪ともいふ。佛の本意に背くものは佛法の中の賊である。○法山の綠林　前漢の末に荆州の綠林山に賊が多く集つた故事により、賊のことを綠林の徒といふ。佛法の中の賊といふ意。○義農の世　支那の古代伏羲氏の王たりし時と神農氏の王たりし時は、天下泰平であつた。○唐虞の國　堯は陶唐氏といひ舜は有虞氏といふ、共に古の聖帝でよく國を治めた。○法水の淺深　何れの宗で說く所の敎が深いか淺いかをよく究めて、其の最もすぐれたるものに歸依するのである。

此處に出したる客の言は、法華經の世に弘まるについての順序を示したるものである。一國擧つて法華經に歸依して、一人も異つたる信仰をもたぬやうになる事が固より理想であるけれども、凡て物事には順序があつて、さう急速に目的を達することは出來ぬ。それ故に先づ釋尊の貴むべきを知らせる事から始むべきである。一切衆生を悉く吾が子と視て、之を盡く救護すべき志を以て世に出て法を說かれたる釋尊の洪恩

を忘れて、その吾々に遺されたる貴い經典を排斥して顧みぬといふが如きは、惑への甚しきものである。先づ此の如き妄見を打破ることが第一の急務である。たとへ末法の世に及ぶとも吾々が佛性を具有せることは佛の在世の時の如くである。また吾々に遺されたる佛の貴い經典には即ち佛の魂が籠つてゐるのである。此の教の亡びぬ限り、佛は今も吾々の眼前に在すものと思はなければならぬのである。法華經の中に、佛の御精神が此經によつて後世に傳はることを述べて、

復た舍利を安んずることを須ゐざれ。所以はいかん、此中には如來の全身まします。——法師品

〔舍利とは佛骨のことである、法華經さへあれば佛骨を安んじて禮拜するに及ばぬといふのである。此中とは即ち此經の中といふ意である。〕

といひ、又此の貴い經典を汎く世に弘むる者の貴いことを稱へて、

佛子此地に住すれば則ち是れ佛受用したまふ。常に其中に在して、經行し若くは坐臥したまはん。——分別功德品

とて、眞の佛弟子の居る所に佛がいつも宿りたまふことを說き示されてある。されば末法の世に於ても釋尊の遺されたる敎に賴ることを忘れてはならぬのである。此事が明になれば、之に次いて『然らば釋尊の遺經中にいづれが最勝のものであるか』といふ問題と、『いづれの經が末法の世の吾等を救ふべきものであるか』といふ問題が解決せられて、法華經の流布すべき順序となるのである。『法水の淺深を斟酌し佛家の棟梁を崇重せん』とは即ち此の順序をいふのである。

主人悅曰。鳩化爲レ鷹。雀變爲レ蛤。悅哉汝交二蘭室之友一。成二麻畝之性一。誠顧二其難一。專信二此言一。風和浪靜。不日豐年耳。但人心者臨レ時而移。物性者依レ境而改。譬猶二水中之月動レ波。陣前之軍靡レ劍。汝當座雖レ信。後定永忘。若欲レ先安二國土一。而祈二現當一者。速回二情慮一。忿加二對治一。所以者何。藥師經七難內。五難忽起。二難猶殘。所以佗國侵逼難。自界叛逆難也。大集經三災內。二災早顯。一災未レ起。所以兵革災也。金光明經內種々災過。一一雖レ起。佗方怨賊侵二掠國內一。此災未レ露。此難未レ來。仁王經七難內。六難今盛。一難未レ現。所以四方賊來侵レ國難也。加之國土亂時先鬼神亂。鬼

神亂故萬民亂。今就二此文一。具案二事情一。百鬼早亂。萬民多亡。先難是明。後災何疑。若所レ殘之難。依二惡法之科一。並起競來者。其時何爲哉。帝王者基二國家一而治二天下一。人臣者領二田園一而保二世上一。而佗方賊來而侵二逼其國一。自界叛逆而掠二領其他一。豈不レ驚哉。豈不レ騷哉。失レ國滅レ家。何所遁レ世。汝須下思二一身之安堵一者。先禱四表之靜謐上者歟。

主人悅んで曰く、鳩化して鷹となり、雀變じて蛤となる。悅ばしい哉汝蘭室の友に交りて麻畝の性と成る。誠に其難を顧みて專ら此言を信ぜば、風和ぎ浪靜にして不日に豊年ならんのみ。但し人の心は時に隨ひて移り、物の性は境に依りて改る。譬へば水中の月の波に動き、陣前の軍の劍に靡くがごとし。汝當座に信ずと雖も、後に定めて永く忘れん。若し先づ國土を安んじて現當を禱らんと欲せば、迷に情慮を回らし忍ぎ對治を加へよ。所以は何。樂師經の七難の內、五難忽に起り二難猶ほ殘れり。所以佗國侵逼の難と自界叛逆の難なり。大集經の三災の內、二災早く顯はれ一災未だ起らず。所以兵革の災なり。金光明經の內の種々の災過、一々に起ると雖も、佗方の怨賊國內を侵掠する、此災未だ露はれず此難未だ來らず。仁王經の七難の內、六難今盛にして一難未だ現ぜず。加之國土亂れん時は先づ鬼神亂る鬼神亂るゝが故に萬民亂ると。今此文に就て具に事の情を案ずるに、百鬼早く亂れ萬民多く亡ぶ。先難是れ明なり、後災何ぞ欺はん。若し殘る所の難、惡法の科に依りて並び起り競ひ來らば、其時何か爲んや。帝王は國家を基として天下を治め、人臣は田園を領して世上を保つ。而るに佗方の賊來りて其國を侵逼し、自界叛逆して其地を掠領せば、豈に驚かざらんや、豈に騷がざらんや、國を失ひ家を滅せば、何れの所にか世を遁れん。汝須らく一身の安堵を思はゝ、先づ四表の靜謐を禱るべき者か。

○鳩化して鷹となり　禮記の月令に、仲春の月の條『桃始めて華さき倉庚鳴き、鷹化して鳩となる』とあるを轉用したのであらう。○雀變じて蛤となる　同じく月令の季秋の條に『鴻雁來賓し、爵大水に入りて蛤となる』に基く。いづれも來訪した旅客の心の翻つたのに譬へたのである。○麻畝の性　麻は直いものであるから、蓬

をも麻の中に植ゆれば皆直くなると言ひ傳へてある。麻畝の性とは直く正しい性のこと。○對治　重い病に療治を加へて直すことであるが、邪法を斥けて正法に弘むるに譬へてある。○一難未だ現せず『四方の賊來りて國を侵し、內外の賊起り』云々とある第七の難のことである。○先難是れ明　天變地夭の諸難は既に明に現はれて居る。○後災何ぞ疑はん　外國の侵掠と國內の謀叛との二難も必ず起るべきこと疑はれぬ所である。○自界叛逆　自國の內に叛く者が出て兵亂となること。

此の一段に至つて、日蓮上人が此の立正安國論を著はしたる精神が最も力强く言ひ現はされてある。種々なる天變地夭は吾々を脅さんが爲に起るのではなくて、吾々に大なる覺醒を與へんが爲に起るのである。之によつて吾々が覺醒すれば、一時の禍は即ち永遠の福の元となるべきである。今日の科學者は物質的方面から凡ての物を見て、天地間の凡ての變化に機械的の說明を施すが、それも一種の見方であつて、確かに眞理を含んでゐる。しかし又他の方面からして此と全く相異つたる見方をすることも出來るのである。譬へば人の運動を生理的に說明も出來るけれども、また心理的の說明も立派に成立つのと同じことである。大乘佛敎の精神からいへば獨り吾々人類に靈妙なる心が具はつてゐるのみならず、天地萬有が盡く靈妙なる力の中に包まれて、活きて働いて居るのである。されば吾々が相互ひに感化を與へあふことが出來るのみならず、吾々と天地萬有との間にも感應が有り得るのである。偉大なる聖者の過ぐる所には、草にも木にもある貴い、感化の跡が殘つて居る。所謂人貴きが故に所貴しとはこれである。若し草木石土に全く靈がないならば、如何して此の如きことが有り得べきであらうか。斯く考へて來ると、吾々の一擧一動は獨り吾々の周圍の人に對して影響を與ふるのみならず、吾々の周圍の一切の物を動す力をもつて居るといはなければならぬのである。吾々の周圍にある山川草木も、吾々の頭上に照り渡つて居る日月星辰も皆活きて居るのである。吾々は山川草木や日月星辰と共に活き共に住んで居るのである。吾々は一日たりとも孤獨にして活きて居ることは出來ぬ。されば佛敎に於ては父母の恩、一切衆生の恩、國王の恩、三寶の恩を數へて四恩といひ、此の四恩に報ぜんことを忘れてはならぬと誡めてある。更に此意を推し擴めていへば、吾々は一

切の人のみならず一切の物にも恩を負うて居る者である。吾々は互ひに親しい情を以て相睦み相交るのみならず、吾々を圍んでゐる天地萬有に對しても常に溫い情を以て臨むべきである。されば種々なる天變地夭についても徒に之を歎き悲むことを爲さず、之を以て吾々に與へらるゝ大なる警告であると解して、互ひに深く戒慎して今までの宿弊を改むることに力を用ゆべきである。

日蓮上人は玆に引いたる諸經の文によつて、正法の行はれぬ國に種々なる天災地變の起るべきことを信じて居た。されば正嘉元年以來の種々なる變災に出逢つて、諸經の中に說かれた所の少しも誤りなきことを確め、今こそ日本國中の凡ての人が眞に覺醒すべき時であると思ひ定めた。それで此國の蒙る災害は地震や洪水に止まらず、やがて外國の侵掠をも受け、國內にも叛亂が起るであらうと推斷した。斯く推斷した以上は手を束ねて之を見て居ることは出來ぬので『神のため君のため國のため一生衆生の爲に』此の立正安國論を作り之を北條氏に提出したのである。然らば此の外國の侵掠によつて此國が滅亡するかといふに、決してさうではない。外國の侵掠といふ事もまた此國に對して與へらるゝ大なる警告であつて、之によつて正法の流布すべき機運を開くべしとは上人の深く信じて居た所である。法華經は末法の世に及んで世に弘まり一切衆生を救ふべきこと、佛の明言したまへる所であれば、更に疑ふべきやうは無い。然るに此經は印度にも廢れ支那にも廢れ、獨り吾國に於て流布すべき端を開いて居る。若し吾國が滅亡するならば法華經の流布は全く止み、佛の豫言は空しくなつてしまはなければならぬ。此の如きは日蓮上人の決して信じ得られぬことである。されば假令北條氏はじめ多くの有力者が上人の言を容れずとも、上人の豫言の適中したるによつて一層信を增したる人々が不惜身命の覺悟を以て法華經の信心を貫くならば、久しき歲月を經ての後には此國と此法との共に榮ふべき時が必ず到來するであらう。

日蓮が一類は異體同心なれば、人々少く候へども大事を成じて必定法華經弘まりなんと覺え候。惡は多けれど一善に勝つことなし。譬へば多くの火あつまれども一水には消えぬ。此一門もまたかくの如し。——異體同心事

といふのは單に其の一門を勵ますんが爲の言ではなく、上人の確信を語るものである。

されば上人が佐渡に配流中に著はしたる觀心本尊鈔の中に於ては、むかし傳敎大師が此の法華經の汎く世に流布すべき時を考へて『五濁の生鬪諍の時なり』といつたのを引いて、

此釋に鬪諍の時と云々。今の自界叛逆、西海侵逼の二難を指すなり。此時地涌千界出現して本門の釋尊の脇士となり、一閻浮提第一の本尊此國に立つ可し。月支震旦未だ此本尊ましまさず。

といひ、更にまた

此を以て之を惟ふに正像に無き大地震大彗星等出來す。此等は金翅鳥修羅龍神等の動變にあらず。偏に四大菩薩を出現せしむべき先兆なるか。

といつてある。法華經の涌出品には、大地の底から涌出したる諸菩薩が釋尊に對つて、必ず再び末法の世に出て此經を弘むべきことを誓つたことが記されてある。其の諸菩薩はいかにも莊嚴微妙の相あつて人々の共に歎稱する所であつたが、其中にも上行、無邊行、淨行、安立行の四菩薩は此等の上首たり導師たる者であつた。此の經文に基いて、末法に出て此經を弘むる者を地涌の菩薩の再生といふのである。此の如く日蓮上人は深く世を憂うると共に、將來には大なる希望を有して居たのである。但したとへ將來に希望を有せりとも、眼前の世の中が非常なる苦境に陷るを見て之を坐視することは出來ぬから諫曉に力を用ゆるのである。世を憂へて而も絶望せず、將來に希望をかけて而も眼前の事を忽且にせぬところ、上人の眞に仰ぐべく貴むべき所以である。

就レ中人之在レ世。各恐二後生一。是以或信二邪敎一。或貴二謗法一。各雖レ惡レ迷二是非一。而猶哀レ歸二佛法一。何同以二信心之力一。妄宗二邪義之詞一哉。若執心不レ翻。亦曲意猶存。早辭二有爲之鄕一。必墮二無間之獄一。所以者何。大集經云。若有二國王一。於二無量世一。修二施戒慧一。見二我法滅一。捨不二擁護一。如レ是所レ種無量善根。悉皆滅失。乃至其王不レ久。當レ遇二重病一。壽終之後。生二大地獄一。如レ王夫人太子。大臣城主。柱師郡主宰臣。亦復如レ是。

就中人の世に在るや各後生を恐る。是を以て或は邪敎を信じ、或は謗法を貴ぶ。各是非に迷ふことを惡むと雖も、而も猶ほ佛法に歸することを哀む。何ぞ同しく

信心の力を以て安りに邪義の詞を宗めんや。若し執心翻さず、亦た曲意猶ほ存せば、早く有爲の鄉を辭して必ず無間の獄に墮ちなん。所以は何。大集經に云く、若し國王有りて、無量世に於て施戒慧を修するとも、我が法の滅するを見て、捨て擁護せずんば、是の如く種ゆる所の無量の善根悉く皆滅失し。乃至、其王久しからずして當に重病に遇ひ、壽終の後には大地獄に生ずべし。王の如く夫人太子大臣城主、柱師郡主宰官も亦た復た是の如くならん。

○佛法に歸することを哀む　敎の正邪がよく分らぬのは氣の毒であるが、それでも佛法に歸依することだけは忘れずに居るのがまだ殊勝である。○同じく信心の力を以て　同じく信心をするのならば、佛意にかなはぬ宗派に歸依して邪義を述ぶる詞を崇め尊ぶことを止めるが宜いのである。○有爲の鄉　現世のことである。有爲とは因緣によつて種々の業をなし、苦を作り罪を作つて止まぬことである。○大集經

此文は前に引いた所と同じである。

此處に重ねて大集經の文を引かれたのは、眞の菩薩行に就て世の人の惑を釋かなければならぬといふ親切の心からである。敎の貴いことも法の重んずべきことも全く辨へぬ者は、眞に憫むべき者であるが、切角に信心を凝しながら其の信ずる所が正しい道に外れて居る人は、殊に憫むべき悼むべく者といはなければならぬ。世間には此の問題を比較的に單純に考へて居る人が少くない。いかなる敎でも苟くも敎と名のつく以上は相當に善い事を敎へるものであらうから、强いて擇み立てをせず、宜しきに應じて種々の敎の中で自分に適當と思はるゝ所を採れば、それで充分であらうといふ考への人が往々にしてある。『分け上るふもとの道は異れど同じ高嶺の月を見るかな』といふ歌などもある。しかし其の分れたる道が果して皆高嶺に達すべきものか、但しは右左と迂曲していつ迄も上には達せず、却て横に外れてしまふことがありはせぬか。此處に深く意を用ゐなければならぬ。苟くも信ずる以上は之を心に信ずるだけでなく之を身に行はなければならぬ。若し其の信仰の中心が定まらず、彼もよし此もよしといふ有樣であるならば、萬難を排して之を實行しやうといふ大決心の生じやう筈がない。又其の擇んだ敎が正しものでなければ、熱心になるほど愈々自身の惑も深くな

り、又多くの人を共に惑はすことになるべきである。日蓮上人が丁寧反覆して此事に言を盡すのは實に之が爲である。

仁王經云。人壞二佛敎一。無二復孝子一。六親不レ和。天龍不レ祐。疾疫惡鬼日來侵害。災怪首尾。連禍縱横。死入二地獄餓鬼畜生一。若出爲レ人。兵奴果報。如レ響如レ影。如二人夜書。火滅字存一。三界果報。亦復如レ是。

仁王經に云く、人佛敎を壞らば復た孝子無く、六親和せず、天龍も祐けず、疾疫惡鬼日に來りて侵害し、災怪首尾し、連禍縱横し、死して地獄餓鬼畜生に入らん。若し出て人と爲りては兵奴の果報ならん。響の如く影の如く、人の夜書するに、火は滅すれども字は存するが如く、三界の果報も亦た復た是の如し。

○六親　種々の說があるけれども、父子兄弟夫婦といふのがまづ穩當であらう。○災怪首尾し　首と尾と連るやうに相連つて絕えぬことである。○兵奴　軍隊に雇はれて物を運搬するもの、至て賤しくて苦しい業である。○響の如く影の如く　響の音に應じ影の形に伴ふ如く、吾々の爲す業には必ず其の報が伴ふものである。○火は滅すれども字は存す　燈火の下で書いた字は、火を消した後でも殘つて居る。此世で爲した事の報は、此世の生が終つても未來まで續くものである。

此の仁王經の語をよく味はなければならぬ。人生を離れて敎といふものは無い、吾々の實生活に關係のない敎は如何に高尙でも役に立たぬ。日蓮上人が四條金吾を訓戒した中に、

敎主釋尊の出世の本懷は人の振舞にて候ひけるぞ。――崇峻天皇事

といつてある。此處の經文に、佛敎を壞れば孝子もなく六親も和せぬといふは、即ち能く佛敎が人道の根柢たるべきことを明にするものである。佛の敎に依つて有らゆる煩惱を除き、佛の具有したまふ大慈悲の御心を學ぶことになれば、忠も孝も自然と行はれる筈である。煩惱とは小なる自己に囚はれて他を顧みぬ所より生ずるものである。之に反して一切衆生の苦を吾が苦として之が救護の爲に力を盡さるゝ者が佛である。されば佛の御心に近づくに隨ひ、自己の利害得失をすてゝ他の人の爲に力を盡さるゝを得ぬやうになるわけである。此の心を以て親に事ふれば則ち孝子たり、此の心

を云て君に事ふれば則ち忠臣たるべきである。梵網經に、

一切の行は信を以て首と爲す、衆德の根本なり。

とあるのも、佛の敎を信ずることが有らゆる德行の本となるべきことを示されたものである。斯く煩惱を去つて、淸く氣高い心を以て世に立つならば、必ず大なる功德を積み得べきに定まつて居る。因果の關係は少しも狂ふものではない。たゞ其の結果が早く現はれることもあり、或は久しくして後に現はれることもあるから、凡夫はたゞ眼前の事のみを見て往々にして因果の關係を無視するやうになるのである。法句經の中に

もと我が造る所は後我自ら受く。惡を爲して自ら更むること、鋼を以て珠を鑽るが如くせよ。

とあるのも亦た貴い敎訓である。一日の行を忽且にして永く悔を遺してはならぬ。法華經第二云。若人不信。毀二謗此經一。乃至其人命終。入二阿鼻獄一。同第七卷不輕品云。千劫於二阿鼻地獄一。受二大苦惱一。

法華經の第二に云く、若し人信ぜずして此經を毀謗せば、乃至、其人命終して阿鼻獄に入らん。同第七卷の不輕品に云く、千劫阿鼻地獄に於て大苦惱を受く。

○不輕品　不輕菩薩が如何なる人に逢ふも必ず之を禮拜し、之が爲に迫害せられ嘲笑せられても瞋りを發しなかつたことを述べられたものである。○千劫阿鼻地獄に於て　劫とは長時と譯すので、千劫とは非常に長い歲月の間である。これは不輕菩薩に迫害を與へた者共が其の報として永く大苦を受くることである。

此の譬諭品の句は前にも引いてある。次の不輕菩薩の事も前に述べたが日蓮上人は殊に此の不輕品を重んじ、四條金吾に對して

一代の肝心は法華經、法華經の修行の肝心は不輕品なり。不輕菩薩の人を敬ひしはいかなる事ぞ。——崇峻天皇事

といつた程であるから、此處に此の不輕品の事を少しく委しく說くとしやう。不輕菩薩は即ち釋尊の前身である。遠いむかし增上慢の者が世に勢力を得て居た時に一人の比丘があつた。常に行きあふ人に對して悉く禮拜して、

我深く汝等を敬ふ、敢て輕慢せず。所以はいかん、汝等皆菩薩の道を行じて當に作佛することを得べし。

といつた。即ち人々が佛性を具へたるに對して、之を敬ふの意を表したのである。それで多くの人が此の比丘に名をつけて常不輕といつた。其の禮拜せらるゝ者の中にも此の比丘の深意を解せず、却て嘲弄せられた如くに考へて怒りを發し、

是の無智の比丘、何れの所より來りて自ら我汝を輕しめずといひ、而も我等がために當に作佛するを得べしと授記する。我等是の如き虛妄の授記を用ゐず。

とて之を罵り、或は杖木瓦石を以て之を打擲する者もあつたが更に怒ることなく、遠くに走り避けながら、

我敢て汝等を輕しめず、汝等皆當に作佛すべし。

と唱へて居た。此の功德によつて、後には神通力を得るやうになり、廣く人の爲に法を說いた。彼の杖木瓦石等の害を與へた者は、此の比丘が斯く貴い人となつたのを見て皆之に信伏し、之に隨つて敎を受けた。けれども最初に瞋恚の念を發して之に種々の迫害を與へたるその報として、無間地獄に墮ちて久しく大なる苦惱を受け、その罪を償ひ終つて又佛の敎を聽き、終に正しい覺を得たといふのである。此の不輕菩薩は後に佛と成ることを得た、これ即ち釋尊である。彼の迫害を與へた者共は其の罪の報として多くの苦を受けた。けれども後にその過を悔いた故に、その罪を償ふだけの苦を受けた後には又佛の敎によつて救はれたのである。因果の關係は少しも狂ふ所はない。吾々は眼前の事のみを見ず、永遠の計を爲すべきである。

涅槃經云。遠二離善友一。不レ聞二正法一。住二惡法一者。是因緣故沈沒在二於阿鼻地獄一。所レ受身形。縱橫八萬四千由延。

涅槃經に云く、善友を遠離し、正法を聞かず、惡法に住せば、是の因緣の故に沈沒して阿鼻地獄に在り、受くる所の身形、縱橫八萬四千由延ならん。

○善友　正しい道に誘ひ導く友を善友といふのである、○惡法に住す　正しからぬ敎を信じて此中から出ることの出來ぬことである。○由延　由旬といふも同じことである。一日の里程をいふので、その數に就ては種々の說がある。

此の涅槃經の文も因果の關係の少しも違はぬことを說いたものであるが、正法に入るも邪法に惑はさるゝも多くは其の友とする所の如何によることを特に注意しなければならぬ。法句譬喩經に面白い物語りが出て居る。釋尊が或る弟子と共に道を行かれた時に地上に紙が落ちてゐた。其弟子は紙を取つて嗅いだところが大層好い匂ひがした。釋尊が其紙は何故に好い匂ひがするのかと問はれたのに對して、彼の弟子は『此れ香を裹める紙なり、今捐棄すと雖も香しきこと故の如し』と答へた。又暫く行くうちに地上に繩の切れたのがあつた。弟子は取つて之を腥ぎ『此繩は醒しこれ魚を繫げるなり』といつた。其時釋尊は之に敎へて、

夫れ物本と淨きも皆因緣によつて以て罪福を興す。賢明に近づけば則ち道義隆く、愚闇を友とすれば則ち殃罪臻る。譬へば彼の紙と繩と、香に近づけば則ち香しく、魚を繫げば則ち腥きが如し。漸染翫習して各々自ら覺らざるのみ。

と仰せられた。まことに其の四圍の境遇より受くる感化ほど力强いものはない。交る所の人を擇ぶには特に意を用ゐなければならぬ。

廣披二衆經一。專重二謗法一。悲哉皆出二正法之門一。而深入二邪法之獄一。愚矣各懸二惡敎之網一。而鎭纏二謗敎之網一。此朦霧之迷。沈二彼盛焰之底一。豈不レ愁哉。豈不レ苦哉。汝早改二信仰之寸心一。速歸二實乘之一善一。然則三界皆佛國也。佛國其衰哉。十方悉寶土也。寶土何壞哉。國無二衰微一。土無二破壞一。身是安全。心是禪定。此詞此言。可レ信可レ崇矣。

廣く衆經を披くに、專ら謗法を重しとす。悲しい哉皆正法の門を出て深く邪法の獄に入る。愚なるかな各〳〵惡敎の網に懸りて鎭に謗敎の網に纏はる。此の朦霧の迷ひ、彼の盛焰の底に沈む。豈に愁へざらんや、豈に苦まざらんや。汝早く信仰の寸心を改めて、速に實乘の一善に歸せよ。然れば則ち三界は皆佛國なり、佛國其れ衰へんや。十方は悉く寶土なり、寶土何ぞ壞れんや。國に衰微なく土に破壞なくんば身は是れ安全にして心は是れ禪定ならん。此詞此言信ずべく崇むべし。

○此の朦霧の迷　現世に於て邪敎に迷つて氣のつかぬこと。○彼の盛焰の底　來世に地獄に墮つること。盛焰とは地獄に猛火が燃ゑて居ることをいふのである。○實乘の一善　法華經は眞實の敎で、凡ての敎の歸着すべき所のものである故に、唯一

乘といふのである。○皆佛國　凡ての者が佛の敎に歸してしまへば、其處に佛の國土が實現されるので、娑婆即寂光土といふも此事である。○禪定　心の騷がず亂れず、常に靜なることをいふ。

是れ則ち一篇の結論である。佛の吾々に遺されたる敎は、吾々をして皆共に佛と同じ境界に到達せしむることを目的として說かれたものである。吾々が凡夫の境界から一歩一歩と佛の境界に近づいて行けば、それだけ吾々の住む所の娑婆世界が極樂淨土に近づいて行くわけである。吾々の心の中には佛となるべき種もあり、地獄に墮つべき性質も存するのである。その何れに就いて何れをすつべきか。最初の一歩の差は後に千里の懸隔を生するものである。而して吾々は皆孤獨に生活することの出來ぬもので、互ひに相集り社會的の生活を營んで居るのである。されば自身の行ひが如何に正しくても、他に邪曲の行ひをして少しも反省せぬ者があれば、その影響を受けぬわけには行かぬのである。譬へば夏の炎天に當つて塵埃の立つのを恐れて水を播くが、たとへ自分の家の前だけ水を播いても、隣の家の前が乾いて居れば其處の塵埃は風の吹き廻し次第で自分の家に入るであらう。若し塵埃を恐るゝならば自分の家の前に水を播くと共に近隣の家にも勸めて、共に水を播かせなければならぬ。但し自分の家では水を播かずに置いて他の家にばかり勸めても、誰も相手にはならぬであらう。世を安んじ國を守らんとする者は、自ら正法を信じて而る後に他の人に勸むることに力を用ゐなければならぬのである。自己の心を正しくすることを忘れて天下國家を論ずるは愚の至である。所謂『信仰の寸心を改むること』がその發足點で、此より努力して懈らぬならは、千里の遠きに到ることも決して望み難き業ではない。

客曰。今生後生。誰不ㇾ愼誰不ㇾ恐。披二此經文一。具承二佛語一。誹謗之科至重。毀法之罪誠深。我信二一佛一而抛二諸佛一。仰二三部經一而閣二諸經一。是非二私曲之思一。則隨二先達之詞一。十方諸人亦復如ㇾ是。今世者勞二性心一。來生者墮二阿鼻一。文明理詳不ㇾ可ㇾ疑。彌仰二貴公之慈誨一。益開二愚客之癡心一。速回二對治一。早致二泰平一。先安二生前一。更扶二沒後一。唯非二我信一。又誡二他誤一耳。

文應元年(太歲庚申)勸ㇾ之。從二正嘉一始ㇾ之。文應元年勸畢。

客の曰く、今生後生、誰か慎まざらん誰か恐れざらん。此經文を披きて具に佛語を承るに、誹謗の科至て重く毀法の罪誠に深し。我一佛を信じて諸佛を拋ち、三部經を仰ぎて諸經を閣くは、是れ私曲の思に非ず、則ち先達の詞に隨へるなり。十方の諸人も亦た復た是の如くならん。今世には性心を勞し來生には阿鼻に墮せんこと文明に理詳なり、疑ふべからず。彌々貴公の慈誨を仰ぎ、益々愚客の癡心を開けり。速に對治を回して早く泰平を致し、先づ生前を安んじて更に沒後を扶けん。唯だ我が信ずるのみにあらず、又他の誤を誡めんのみ。

文應元年之を勘ふ。正嘉より之を始めて、文應元年勘へ畢んぬ。

○今生後生　今生の業を慎み、後生の報を恐るべきである。○一佛　西方淨土の敎主たる阿彌陀佛のこと。○生前を安んじ　天下泰平國土安穩を謀ること。○沒後を扶けん　來世に於て惡道に墮ちぬやうにすること。○正嘉より之を始め　岩本實相寺の經藏に入つて、一切經を覆讀し、此の天災地變を日本國の人が自ら招く所と解するの誤りならぬことを確め、然る後に此の立正安國論を草せられたのである。

吾々の生命は獨り現世にのみ限られたもので無い。しかしながら現世の生命と來世の生命と二種の生命があるのでは無く、現世より來世に續く唯一つの生命があるのみである。それ故に現世に於て人らしい活き方も出來なかつたものが、來世に於て佛菩薩の境界に近づくといふことは到底信ぜられぬ。若し吾々が正しい敎を聽いて今迄の過を悔ゆるならば、その日から直に佛の境界に近づくべき第一歩を踏み出したものである。斯くて此世に於ける生活を久しく續くるならば、その周圍の人にも善い感化を與へ、世を益し國を益すること莫大なるものがあらう。或は又此世を久しからずして辭し去るとも、其の來世に於ける生活は更に光明に充ちたるものであらう。『現世安穩後生善處』といふ藥草諭品の語は動すべからざる所である。釋尊は一切衆生をして共に佛の境界に達せしめんとの念よりして世に出て此の如き貴い法を說かれたのである然るに斯る貴い法のあることを知らずに、いつ迄も迷ひの闇の中に彷徨する者の多いのは哀むべきの至である。幸にして佛の貴い法を聽いて之に歸依したものは、佛恩の限りなく有難いことを知ると共に、斯る洪恩に浴し得ぬものゝ不運を深くも憫み哀む

べきである。此等の人々を覺醒せしめて共に貴い佛道に入らしむべく力を盡すのが、即ち佛恩に報ずる所以の道である。互ひに心を此に致さなければならぬ。

○

立正安國論の本文は以上を以て終るのであるが、下總中山の法華經寺にある御眞蹟に就て見ると、之に奥書が付いて居る。是は安國論を北條氏に提出してから十ヶ年を經たる文永六年十二月に書かれたものである。彼の安國論の中に必ず敵國の侵掠を受くべきことを豫言されたのが正しく適中して、文永五年に蒙古からの脅迫的の國書が到來し、翌六年には重ねて使者が來た。日蓮上人は最初から大なる確信を以て安國論を書いたのであるが、いよ〳〵其の豫想したことが實際に現はれ來たのを見ては、今更ながらに佛の智慧の洪大なることを感嘆せざるを得なかつた。上人は自分の臆斷によつて此の豫言をしたのではない、諸經の本文に照し合せて此の斷定を下したのである。されば其の豫言が適中した事によつて、自分の考へが佛意に叶へるものであることを確め得たわけである。是は上人に大なる勇氣を與へたに違ひない。上人は法華經の行者を以て自ら任ずると共に、其の一門を導いたのである。法華經の行者たる上人の言ふこと行ふことが果して佛意に叶ふならば、上人に率ゐられて法華經の行者たらんと勵む人々も亦た眞の佛弟子として認めらるべきに定まつて居る。然らば此等の人々の勢力が加はつて、法華經が國中に遍く流布するやうになれば、此國の凡ての憂患も除かるべき理である。日蓮といふ一個人の問題ではない。日蓮上人の豫言が適中して多くの人に感服せられても、或はその豫言が外れて世間の嘲笑を受けても、一個人としては大なる問題ではないが、その適中すると否とは法華經の世に行はるゝか廢るかを決するものである。又此國の將來をも決すべき事である。されば上人は此の次第を立正安國論の奥に附記して、自ら勵みまた他を勵ますの資としたのである。『之に準じて之を思ふに未來も亦た然るべし』といひ、『是れ偏に日蓮の力にあらず』といふ語は能く此際に於ける上人の心事を語るものである。

去見三正嘉元年(太歳丁巳)八月廿三日戌亥之尅大地震二勘レ之。其後以三文應元年(太歳庚申)七月十六日一。付三宿谷禪門一。奉レ献二最明寺入道殿一。其後文永元年(太歳甲子)七

月五日大明星之時。彌彌知二此災根源一。自二文應元年一(太歳庚申)至二于文永五年(太歳戊辰)後正月十八日一。經二于九箇年一。自二西方大蒙古國一。可レ襲二我朝一之由。牒狀渡レ之。又同六年重牒狀渡レ之。既勘文叶レ之。準レ之思レ之。未來亦可レ然歟。此書有レ徴文也。是偏非二日蓮之力一。法華經之眞文。所二聖感應一歟。

文永六年(太歳己巳)十二月八日寫レ之。

去る正嘉元年八月廿三日戊亥の尅の大地震を見て之を勘ふ。其後文應元年七月十六日を以て、宿谷禪門に付きて最明寺入道殿に献じ奉る。其後文永元年七月五日大明星の時、彌々此災の根源を知る。文應元年より文永五年後の正月十八日に至るまで九箇年を經て、西方大蒙古國より我朝を襲ふべきの由、牒狀之を渡す。又同六年重ねて牒狀之を渡す。既に勘文之に叶ふ。之に準じて之を思ふに、未來も亦た然るべきか。此書は徴ある文なり。是れ偏に日蓮の力に非ず、法華經の眞文、聖の感應する所か。

文永六年十二月八日之を寫す。

○戊亥の刻　今の午後八時乃至十時のことである。○宿谷禪門　また宿屋とも書いてあるが北條時頼及び時宗の近侍の士であつたやうである。左衞門尉光則といつたが後に出家した。禪宗に歸依して出家したので禪門といふ。但し出家の姿でも其以前の如くに出仕して職務を執つてゐる者が其頃には多くあつた。○最明寺入道殿　北條時頼は十年間執權であつたが、康元元年に髪を剃つて、兼て建て置いた最明寺に住したので、最明寺入道殿といつた。時に三十歳である。しかし此の後も實權は時頼の手にあつた。○此災の根元天災地變の起るのは、正法が世に廢れた爲であるといふこと。○後の正月　閏正月のことである。○牒狀之を渡す　高麗王禎が元の世祖に威壓されて使を太宰府によこして元の世祖の書を取次がせたのである。其書には若し元に降伏しなければ兵を遣して討伐すべきことが認めてあつた。○重ねて牒狀　文應六年の春には元の使の黑的等が直接に對馬に來り、又其秋に至り高麗からの使も來たが皆之を却けたのである。○勘文之に叶ふ　諸經の文を考へ合せて書いた立正安國論の中に、必ず外國の侵入あるべきことを豫言したのが正しく適中したのである。

蒙古の來襲は實に吾が國史の上に特記せらるべき大なる國難であつた。此時の蒙古王は有名なる忽必烈で、即ち鐵木眞の孫に當る人である。彼は最初兄を輔けて其の領土の擴張を圖つて居たが、兄の死するに及んで自ら王となり、在位三十四年間に宋を滅して支那の全領土を其國とし國號を元とした。なほ其領土は獨り支那に止まらず亞細亞の大部分と東歐羅巴をも包容したる、實に洪大極まるものであつた。此の如き勢であつたので、朝鮮は勿論その勢力の下に屈してしまつた。そこで彼は勢に乘じて吾が國に臨んだのである。最初に文永三年、その臣黑的等を吾が國に使せしめたが、航海が困難の爲に引返した。因て文永五年に至り高麗王禎をして其の國書を吾に致さしめたのである。此時忽必烈は即位後八年であつた。彼の國書が到來すると共に、朝廷より伊勢大廟其他諸國の山陵に使を遣はして國難を告げ、又諸社に祈禱をなさしめた。而して彼の國書は吾が服屬をすゝめて來たので無禮至極のものであるから、之に返書を與へられぬことに決した。時に鎌倉に於ては北條時宗が執權の職に就いたばかりであつたが、齡は僅かに十八歲であつた。時宗は蒙古を敵として戰ふべき覺悟を定め西國の防備を修むることに充分の力を用ゐた。其後蒙古から數回の國書が來たのに對して、朝廷からは返書を與へられやうとの議もあつたが（勿論その內容は拒絕的のものではあるが）幕府の方は飽くまで最强硬の態度で、斯る無禮の書に對して返事などをするに及ばぬとて、抑へて彼には通達しなかつた。文永十一年十月に至り初めて蒙古の兵が（此時は旣に國號を元と改めて居た）襲來したのであるが、その兵數は高麗兵を合せて凡て三萬三千ばかりであつた。吾が兵も大に奮戰したが何分にも衆寡敵せずして敗北し、彼は殘虐のあらん限りを盡した。然るに二十日の夜に至り暴風雨が起り、彼の船の難破するもの二百餘艘に及んだので、彼は散々の體で遁れ歸つた。

しかし此の戰によつて吾が防備軍の甚だ手薄であることが彼に知られたので、彼よりは翌建治元年にまた降參を勸むる使が來た。時宗は之を龍の口で斯らしめ、此より更に防備を嚴重にすることに全力を注いだ。其後六年を經て大擧して來たのが有名なる弘安四年の役である。此時の敵兵は二十五萬と稱したといふが、實數は高麗兵を合せて十三萬程であつたのである。龜山上皇が身を以て國難に代らんことを伊勢の大廟

に祈られたのは此時である。時に上皇は御歳三十三であつた。世の人は多く北條時宗が若年にして大事に當つたことを稱するが、上皇の斯く御壯齡の御身を以て國難に代らんことを祈られたる御心に感激しなければならぬではないか。吾が軍は五月から敵軍と衝突したのであるが最初は頗る不利の形勢であつた。六月に入つてから漸く有利の勢となつた。而して閏七月一日に至り俄かに颶風が起つて敵艦殆んど皆覆り、吾軍が最後の勝利を收め得たのである。元に於ては其後も吾を伐つ計畫を立てたのであるが終に實行することが出來ずして已んだ。さて此の戰爭は幸にも兩度の颶風があつて彼の艦隊に大なる損害を與へた爲に、結局は吾が勝利となつたのであるが、單に戰爭の勝敗のみからいへば吾が軍に隨分危いところが多かつた。又此の戰爭によつて與へられたる財政上の打擊は頗る大なるものであつた。最初賴朝が鎌倉に幕府を開いた時には、平民が奢侈の風に染まつて滅亡を早めたのに鑑みて、盛に質素儉約の風を奬勵し、所謂鎌倉武士の特色を作り上ぐることに努めた。多くの武士もまた能く賴朝の精神を辨へて、その生活は極めて質素なものであつた。然るに彼の承久の役の結果が北條氏の思ふ通りになつたところから、戰功のあつた者に多く所領を與へ、多くの武士等も勝利に心驕つて漸次に奢侈の生活をするやうになつた。それが爲に其の所領を質入したり、或は竊かに民間の富豪に所領を賣渡すものなども多くなつた。それに續いて連年の饑饉や水害などがあつて、士民共に困難を極め租稅の怠納も增して來た。それでも一旦奢侈になつた生活狀態を元の質素な風に引戻すことはむづかしい有樣で、時賴などの苦心も多くは徒勞に終つた。斯る狀態であつた所へ蒙古の來襲といふ大事が起つたのである。蒙古の使が初めて來たのは文永五年で、弘安四年までに凡て十四年を經て居る。此の久しい間防備のために使つた費用は夥しいものである。弘安四年以後と雖も元が再擧を謀るといふ風聞が盛なので、防備の手を緩めることは出來なかつた。それが爲に上下共に非常に疲弊して、財政の紛亂は殆んど極度に達したのである。殊に武士が幕府の禁を犯して其の領地を質入したり賣渡したりする者は夥しく增して來た。此分で行けば幕府の維持が困難になるに違ひないので、當局者は非常に心を惱ました。その結果として所謂「德政」が發せられて、買賣貸借を無効にすること

を壓制的に命令し、辛うじて一時の急場を彌縫する事にした。しかしながら斯る姑息の策を以て頽勢を盛り返すことの出來やう筈はない。北條氏の幕府が倒壞したのは確かに此の財政の紊亂が其の一大原因をなしたものである。

日蓮上人は蒙古の襲來を以て一大事と爲し、頻りに警告を發したのであるが、幸にも戰爭は吾が勝利となつた。しかし其の影響は至て大なるもので、日蓮上人のいつた通り國の一大事には相違なかつた。北條氏の滅亡は確かに之によつて早められた。又此大事變によつて受けたる國民の精神的動搖は非常なものであつた。今迄にも戰亂は隨分續いたけれども、外國から侵掠を受けたのは今度が始めである。此の未曾有の出來事によつて驚かされた國民の中には、健全なる信仰の上に心を托することの必要を痛感したものもあつたに違ひない。日蓮上人が法華經の此國に弘まるべき瑞相といつたのは、まことに意味の深い語であつた。

立正安國論御勘由來

是は文永五年四月、日蓮上人が法鑒房に與へたる書で、立正安國論撰述の由來を詳しく述べてあるので、後世に至つて斯く名けたのである。其の眞蹟は今下總中山の法華經寺の所藏となつて居る。此の法鑒といふ人は如何なる人か委しく分らぬ。或は日蓮上人の門下高足の一人たる日昭の事だともいひ、或は平三郎左衞門盛時、即ち平左衞門頼綱の父だともいふが、後説の方が信ずべきやうに見える。前にもいつた通り、立正安國論の出來てから九年後、即ち文永五年正月に初めて蒙古の國書が來た。前には最明寺時頼をはじめ幕府の當路者の思慮が足らなかつた爲に、日蓮上人の熱誠を籠めたる警告をも取り上げず、却て上人を流罪に處するやうな亂暴な事をやつた。然るに九年を經て上人の豫言は適中し國難は眼前に迫つたのである。今度こそは北條氏はじめ多くの人達の覺醒しなければならぬ時である。

最明寺時頼は弘長三年に死んで、文永五年はそれより五年の後に當る。而して此年

から時宗が執權の職に就いたのである。それ故に日蓮上人は此年十月に至り時宗に書を贈つて國難に就ての警告を與ふると共に、諸寺の僧との對論を求め、又諸寺の僧にも此事を申送つた。(此時の委しい事情は前に述べた)時に平左衞門へも書を與へてその中には

貴殿は一天の屋梁たり萬民の手足たり、爭でか此國滅亡の事を歎かざらんや愼まざらんや。早く退治を加へて謗法の咎を制すべし。

といつてある。平左衞門は北條氏の家司で且つ侍所司を兼ねて居たので政治上の實權はその手に在るといつても不可なき程の人であつたから、此人一人の向背は何事にも大なる關係がある。それで上人は公然と警告を與へる前に、その父たる法鑒房に委細を申送り、豫め平左衞門に注意を與へて置くやうにさせたものと思はれる。立正安國論を讀む人の參考の爲に之を卷末に附載し、簡單なる註釋を之に加へて置く。

正嘉元年(太歲丁巳)八月二十三日戌亥時。超二於前代一地大振。同二年(戊午)八月一日大風。同三年(己未)大飢饉。正元元年(己未)大疫病。同二年(庚申)亘二四季一大疫不

レ已。萬民既超二大半一招レ死丁。而間國主驚レ之。仰二付內外典一。有二種々御祈禱一。雖レ爾無二一分驗一。還增二長飢疫等一。日蓮見二世間體一。粗勘二一切經一。御祈請無レ驗。還增二長凶惡一之由。道理文證得レ之丁。終無レ止造二作勘文一通一。其名號二立正安國論一。文應元年(庚申)七月十六日。(辰時)付二屋戸野入道一。進二申古最明寺入道殿一丁。此偏爲レ報二國土恩一也。

正嘉元年八月二十三日戌亥時、前代に超えたる大地振。同二年八月一日大風。同三年大飢饉。正元元年大疫病。同二年四季に亘りて大疫已まず、萬民既に大半に超え死を招き丁んぬ。而る間國主之に驚き、內外典に仰せ付けて種々の御祈禱有り。爾りと雖も一分の驗も無く、還て飢疫等を增長す。日蓮世間の體を見、粗ぼ一切經を勘ふるに、御祈請の驗無く還て凶惡を增長するの由、道理文證之を得丁んぬ。終に止む無く勘文一通を造作し、其名を立正安國論と號し、文應元年七月十六日(辰時)屋戸野の入道に付して古最明時入道殿に進め申し丁んぬ。是れ偏に國土の恩に報ぜんが爲なり。

○大地振　地震のことである。日蓮上人は假字や當て字を隨分多くして居る。知らぬのではなく、全く無頓着にやられたものらしい。○國主　正しくいへば日本の國主は天皇より外ないが、政權を執つてゐる者を假に國主といふのである。○內外典　佛敎の經典を內典といひ、其他のを外典といふのであるが、此處では內外典を修むる者の意に用ゐてある即ち僧侶や神官のことである。○道理文證　佛敎の敎理からも考へ、又その證據となるべき經文も明にしたのである。○辰時　午前八時の頃である　○屋戸野　宿屋の假字である　○古最明寺入道殿　故最明寺の假字である。時賴は弘長三年に三十七歲で死んだ。○國土の恩　此國に生れ此國で育つた恩で、佛敎で四恩を數ふる中には國王の恩とある。

其勸文意。日本國天神七代。地神五代。百王百代始于二人王第三十代欽明天皇御宇一。自二百濟國一佛法渡二此國一。至二于桓武天皇御宇一。其中間五十餘代二百六十餘年也。其間一切經並六宗雖レ有レ之。天台眞言二宗未レ有レ之。桓武御宇。山階寺行表僧正御弟子。有二最澄小僧一。(後號二傳敎大師一)已前所レ渡六宗並禪宗雖レ極レ之。未レ叶二我意一。聖武天皇御宇。大唐鑑眞和尙所レ渡。天台章疏。經二四十餘年一己後。始最澄披二見之一。粗覺二佛法玄旨一了。最澄爲二天長地久一。延曆四年建二立叡山一。桓武皇帝崇レ之。號二天子本命道場一。捨二六宗御歸依一。一向歸二伏天台圓宗一。同延曆十三年遷二長岡京一。建二平安城一。同延曆廿一年正月十九日。於二高雄寺一。召二合南都七大寺一。六宗碩學。勤操長耀等十四人一。決二談勝負一。六宗明匠。不レ及二一問答一。閉レ口如レ鼻。華嚴宗五敎。法相宗三時。三輪宗二藏三時所立破了。但非レ破二自宗一。皆知レ爲二謗法者一。同二十九日。皇帝下二敕宣一詰レ之。十四人作二謝表一。奉レ捧二皇帝一。其後代々皇帝。叡山御歸依。孝子超レ仕二父母一。勝レ恐二黎民王威一。或御時捧二宣明一。或御時以レ非處レ理等云云。殊淸和天皇。依二叡山慧亮和尙法威一即位。帝皇外祖父九條右丞相。誓狀捧二叡山一。源右將軍淸和末葉也。鎌倉御成敗不レ論二是非一。背二違叡山一。天命有レ恐者歟。

其勸文の意は、日本國の天神七代、地神五代、百王百代始まり、人王第三十代欽明天皇の御宇に至り、百濟國より佛法此國に渡り、桓武天皇の御宇に至り、其中間五十餘代二百六十餘年なり。其間一切經並に六宗之れ有りと雖も、天台眞言の二宗

は未だ之れ有らず。桓武の御宇に山階寺の行表僧正の御弟子に、最澄といふ小僧あり。己前に渡る所の六宗並に禪宗之を極むと雖も我が意に叶はず。聖武天皇の御宇に大唐の鑑眞和尚が渡す所の天台の章疏、四十餘年を經て己後始めて最澄之を披見し、粗ぼ佛法の玄旨を覺り了んぬ。最澄天長地久の爲に、延曆四年叡山を建立す。桓武皇帝之を崇め天子本命の道場と號す。六宗の御歸依を捨て、一向に天台圓宗に歸伏したまふ。同じく延曆十三年、長岡の京を遷して平安城を建つ。同じく延曆廿一年正月十九日、高雄寺に於て南都七大寺、六宗の碩學、勤操長耀等の十四人を召合せ、勝負を決談せしむ。六宗の明匠一問答にも及ばず。口を閉づること鼻の如し。華嚴宗の五敎、法相宗の三時、三論宗の二藏三時の所立を破し了んぬ。但に自宗を破せらるゝのみならず、皆謗法の者たるを知る。同じき二十九日、皇帝敕宣を下し、之を詰りたまふ。十四人謝表を作りて皇帝に捧げ奉る。其後代々の皇帝は叡山の御歸依、孝子の父母に仕ふるに超え、黎民の王威を恐るゝに勝れり。或御時には宣明を捧げ、或御時には非を以て理に處す等云々。殊に清和天皇は叡山の慧亮和尚の法威に依りて位に即きたまひ、帝皇の外祖父九條右丞相は誓狀を叡山に捧ぐ。源右將軍は清和の末葉なり。鎌倉の御成敗是非を論せず、叡山に背違す。天命恐れ有る者かゝ

○六宗　奈良朝の末までに吾國に傳はつたのは倶舍宗、成實宗、律宗（此の三は小乘）三論宗、法相宗、華嚴宗（此の三は大乘）の六宗である。○山階寺　奈良の興福寺のことである。以前に山城國山科にあつたので、奈良へ移つて後も別稱を山階寺といつたのである。○行表僧正　近江の崇福寺、金光明寺等に住した人であるが、はじめ興福寺で受戒し、禪律法相華嚴等の敎理を學んだのである。○禪宗　奈良朝に傳はつたけれども更に行はれず、鎌倉時代に至つて初めて盛になつた。それ故に奈良朝の佛敎といへば六宗を擧げて、禪宗を數へぬのである。○鑑眞和尚　唐の揚州江陽縣の人であるが、三藏に通じ殊に戒律に精しかつた。懇請せられて吾が天平勝寶六年に、百八十四人の學徒と共に來朝し、生涯を吾國で送つた。來朝の際に瘴氣の爲に盲目となつたが、記臆が強かつたので能く人々を敎へ導くに障りが無かつ

たといふ。○天台の章疏　圓頓止觀（摩訶止觀といふも同じ）法華玄義、法華文句、四教儀、維摩經疏を得て之を寫し、深く研究したのである。○天長地久の爲　皇室の御繁榮と國運の隆昌を祈る爲である。○天子本命の道場　叡山の由來を書いた『山門古記』によれば、根本中堂を皇帝本命の道場と名け、總持院を鎮護國家の道場といふのである。中堂は傳教の創むる所、總持院は慈覺の建つる所である。○天台圓宗　佛の教の中で最も圓滿完全なるものを圓教といふ。法華經の中に說かれた所は佛の眞實の教である故に純圓といふ。天台宗は法華經に依つて立つ所の宗なるが故に圓宗と稱すべきである。○長岡の京　延曆三年に大和の長岡に遷都になつたのであるが、此地は種々の不便があるので更に平安京を營まるゝ事となり、延曆十三年に此處へ奠都になつたのである。○高雄寺　愛宕山の麓に在り、高雄山神護寺といふのである。今は眞言宗に屬してゐる。○南都七大寺　東大寺、興福寺、元興寺、大安寺、藥師寺、西大寺、法隆寺をいふのである。○勤操　三論宗の僧で、大和岩淵寺を開いたのを以て著名である。○長耀　同じく三論宗の僧である。○華嚴宗の

五教　釋尊一代の說法を大別して小乘教、始教、終教、頓教、圓教とし、華嚴宗の教が圓教であるといふ主張である。○法相宗の三時　釋尊一代の說法を三の時期に大別し、第一時は有教小乘、第二時は空教大乘、第三時は中道教大乘と爲し、第三時の中で深密經を最も重しとして宗を立つるのである。○三論宗の二藏三時　聲聞藏即ち小乘と、菩薩藏即ち大乘とに佛教を大別し、又釋尊說法の時期を三大別して、根本法輪即ち華嚴經を說かれた時、枝末法輪即ち阿含以後の說法攝末歸本法輪即ち法華とするのが此宗の立て方である。○宣明　天子の御思食を傳へらるゝ文で、宣命と書くも同じ意である。叡山に御歸依の意を傳へられたのである。○九條右丞相　淸和天皇の御母明子の父なる藤原良房のことである。○右將軍　賴朝のことをいふ。○天命恐れ有る者　天の罰あるべきで即ち源氏の僅かに三代にして亡びたる所以である。

然後鳥羽院御宇。建仁年中。法然大日二人有二增上慢者一。惡鬼入二其身一。狂二惑國中上下一。擧レ代成二念佛者一。每レ人趣二禪宗一。存外山門御歸依淺薄。國中法華眞言學者。被二弃

置二了。故叡山守護天照太神。正八幡宮。山王七社。國中守護諸大善神。不レ喰二法味一失二威光一。捨二國土一去了。惡鬼得レ便至二災難一。結句自二佗國一可レ破二此國一先相所レ勘也。

然るに後鳥羽院の御宇、建仁年中に法然大日といふ二人の增上慢の者あり。惡鬼其身に入りて國中の上下を狂惑し、代を擧げて念佛者と成り、人毎に禪宗に趣く。存の外に山門の御歸依淺薄なり、國中の法華眞言の學者弃置せられ了んぬ。故に叡山守護の天照太神、正八幡宮、山王七社、國中の守護の諸大善神、法味を喰はずして威光を失ひ、國土を捨て去り了んぬ。惡鬼便を得て災難を至し、結句他國より此國を破る可き先相勘ふる所なり。

○大日　惡七兵衞景淸の叔父である。諸宗の敎義を究めて殊に禪を好み、自ら日本達磨宗といひ、歸依する者も少からずあつた。○增上慢　自ら覺り得た所もないのに、得たる所ある如くに考へて得意で居る者をいふ。○惡鬼其身に入り　法華經の勤持品に增上慢の者を稱していへる語である。○山門　叡山と三井寺と對立するやうになつてから、叡山を山門といひ三井寺を寺門といふ。○弃置せられ　世間から

無視せられ捨置かるゝことである。

又其後文永元年(甲子)七月五日。彗星出二東方一。餘光大體及二一國一。此又始レ世己來所レ無凶瑞也。內外典學者。不レ知二其凶瑞根源一。予彌增二長悲歎一。而捧二勘文一已後經二九箇年一。今年後正月。且二大蒙古國國書一。相二叶日蓮勘文一。宛如二符契一。佛記云。我滅度後。經二一百餘年一。阿育大王出レ世。弘二我舍利一。周第四昭王御宇。大史蘇由記云。一千年外。聲敎令レ被二此土一。聖德太子記云。我滅度後。經二二百餘年一。山城國可レ立二平安城一。天台大師記云。我滅後二百餘年己後。生二東國一弘二我正法一等云云。皆果如二記文一。日蓮見二正嘉大地震。同大風。大飢饉。正元元年大疫等一記云。自二佗國一可レ破二此國一先相也。雖レ似二自讃一。若毀二壞此國土一。復佛法破滅無レ疑者也。

又其後文永元年七月五日、彗星東方に出て、餘光大體一國に及ぶ。此又代始りて己來無き所の凶瑞なり。內外典の學者其の凶瑞の根源を知らず。予彌々悲歎を增長す。而るに勘文を捧げて己來九箇年を經て、今年後の正月大蒙古國の國書を見るに、日蓮が勘文に相叶ふこと宛も符契の如し。佛記して云く、我が滅度の敎一百餘年を經

て、阿育大王出世して我が舍利を弘めんと。周の第四昭王の御宇に、大史蘇由が記に云く、一千年の外、聲教此土に被らしめんと。聖德太子の記に云く、我が滅度の後二百餘年を經て、山城の國に平安城を立つ可しと。天台大師の記に云く、我が滅後二百餘年の己後、東國に生れて我が正法を弘めん等云云。皆果して記文の如し。日蓮正嘉の大地震、同じく大風、同じく飢饉、正元元年の大疫等を見て記して云く、佗國より此國を破る可き先相なりと。自讃に似たりと雖も、若し此國土を毀壞せば復た佛法の破滅疑無き者なり。

○佛記して云く　阿育王經の中に記されたる所である。王舍城に於て無勝童子といふものが釋尊に餅を上つたので、釋尊は彼が百年以後に再び世に生れ、正法を世に弘むべきことを豫言せられた。その再生が即ち阿育王である。○昭王の御宇　周の昭王の二十六年四月八日、江河の水は溢れ宮殿は大に震ひ、五色の光氣が西方に見えた。其時太史蘇由は王の問に答へて『大聖人ありて西方に生ずるなり。一千年の後その教此地に及ばん』といつた。果して後漢の代に至り佛教が支那に渡つた。○

聖德太子の記　先代舊事本紀の第三十七卷に出たる語である。○天台大師の記　大師の自ら記されたのではない、大師の語として傳へらるゝ所である。二百年後といへば傳教大師の時に當るのである。

而當世高僧等。與二謗法者一同意者也。復不レ知二自宗玄底一者也。定給二敕宣御教書一。祈二請此凶惡一歟。佛神彌作二瞋恚一。破二壞國土一事無レ疑者也。日蓮復對二治之一方知レ之。除二叡山一。日本國但一人也。譬如二日月無レ二。聖人不レ並レ肩故也。若此事妄言。日蓮所持法華經守護十羅刹治罰蒙レ之。但偏爲レ國爲レ法爲レ人。爲レ身不レ申レ之。復禪門遂二對面一。故告レ之。不レ用レ之。定可レ有二後悔一。恐恐謹言。

文永五年太歲戊辰四月五日

法　鑒　御　房

而るに當世の高僧等は謗法の者と同意の者なり。復た自宗の玄底を知らざる者なり。定めて敕宣御教書を給ひて此凶惡を祈請せんか、佛神彌々瞋恚を作し、國土を破壞せんこと疑無き者なり。日蓮復た之を對治するの方之を知る。叡山を除きて日本國

には但一人なり。譬へば日月の二無きが如く、聖人は肩を並べざるが故なり。若し此事妄言ならば、日蓮が所持の法華經守護の十羅刹の治罰之を蒙らん。但偏に國の爲、法の爲、人の爲にして、身の爲に之を申さず。復た禪門に對面を遂げば、故に之を告げよ。之を用ゐずんば定めて後悔有る可し。恐々謹言。

○自宗の玄底　自宗の教義を深く究むる時は、必ず法華一乘に歸せざるべからざることを知るべきである。○法華經守護の十羅刹　法華經の陀羅尼品に、十人の羅刹女が鬼子母と共に佛前に於て、法華經を弘むる者を守護すべきことを誓つて呪を說き、なほ若し我が呪に順はずして說法者を惱亂せば、頭破れて七分となること阿梨樹の枝の如くならんといつた事が出て居る。○禪門　平左衞門頼綱のことである。

大正十三年四月廿五日印刷
大正十三年四月廿八日發行　〔正價金貳圓五拾錢〕

立正安國論要解

著作者　小林一郎
發行者　東京市京橋區木挽町一丁目十一番地　地涌學會　代表者　三吉顯隆
發行所　東京市京橋區木挽町一丁目十一番地　地涌學會出版部　電話京橋五四八〇　小石川五八六五　振替東京六六三三一番

印刷所　東京市京橋區木挽町一ノ十一　地涌學會印刷所

504
267

終